

宇陀市
歴史的風致維持向上計画

令和 7 年 7 月
奈良県宇陀市

連綿と続く伝統的な営みと、歴史的環境が重なるところに見え隠れする「まちづくりの知恵」を磨き、活かす。

このたび、宇陀市が誇る歴史的環境と、これらを舞台に繰り広げられる伝統的な営み（祭礼行事や生業）をまちづくりに活かすため宇陀市歴史的風致維持向上計画を策定いたしました。

当市は「室生寺」をはじめとして歴史資源が豊富ですが、計画策定にあたり改めて市内全体を見渡してみると、今となっては貴重な伝統行事や風習、歴史的建造物が数えきれないほど多く伝わっていることがわかりました。

伝統的な営みは、多世代交流のよい契機となります。また、これらの行事を通じて、技術や知恵の次世代への伝承がなされております。更に、自然に対する感謝の想いや畏怖の念、他者への思いやりなど、決して忘れてはならない人の心の在り方が、わが宇陀市の歴史的風致に見え隠れしています。

地域の伝統行事に招かれた際に、参加されている皆さんを拝見しておりますと、じつに生き活きとした表情をされております。こうして地域の行事に関わった思い出が、愛着と誇りを培ってきたことも感じます。宇陀市で生まれ育った子供たちが、また、新たに住もうとする若い人たちに、これからもここで暮らしたいと思えるまちづくりへの期待をこの計画書に込めております。

これからも市民の宇陀市への愛着と誇りを醸成するため、歴史に裏付けられた「宇陀らしさ」が凝縮された計画書に沿い、わが市の特性を磨き、一步ずつ事業の歩みを進めていきたいと考えております。それには、歴史的環境や行事を守り伝えて下さる地域の皆様のご協力が欠かせません。

コロナ禍や少子高齢化の影響、社会構造の変化により、歴史的環境や伝統行事の在り方や捉え方も多様になりました。これらの困難を乗り越えながら、歴史を活かしたまちづくりが、宇陀市に更なる豊かさをもたらすものとなるよう、ともに進めてまいりましょう。



宇陀市長 金剛 一智

目次

はじめに

序章

1. 計画策定の背景と目的	5
2. 計画の位置づけ	6
3. 計画期間	7
4. 計画の策定体制	7
5. 計画策定の経緯	8
第1章 歴史的風致形成の背景	11
1. 自然環境	11
(1) 位置	11
(2) 地形・地質	11
(3) 河川	13
(4) 気象	15
2. 社会的環境	16
(1) 市域の変遷	16
(2) 土地利用	17
(3) 人口動態	18
(4) 交通機関	20
(5) 産業・観光	22
3. 歴史的環境	25
(1) 歴史的背景	25
(2) 関わりのある人物	41
4. 文化財等の分布状況	46
(1) 国指定等文化財（一部）／	47
(2) 県指定文化財（一部）／	49
(3) 市指定文化財（一部）／	51
(4) 主な未指定文化財	52
(5) 特産品、工芸品、菓子・料理等特産品	52
(6) 日本遺産の認定	57
第2章 宇陀市の維持及び向上すべき歴史的風致	58
1. 記紀・万葉ゆかりの地の営みにみる歴史的風致	61

2. 伊勢街道の旧宿場町の営みにみる歴史的風致	8 2
3. 宇太水分神社の祭礼行事にみる歴史的風致	1 0 0
4. 室生寺周辺の行事にみる歴史的風致	1 1 5
5. 宇陀市の民俗芸能に見る歴史的風致	1 3 0
6. 宇陀の田畑と山林にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致	1 5 2
7. 薬草の生産と活用まつわる歴史的風致	1 8 9
8. 宇陀松山の水路と商いゆかりの行事にみる歴史的風致	2 1 0
第3章 歴史的風致の維持及び向上に関する方針	2 3 9
1. 歴史的風致の維持及び向上に関する課題	2 3 9
2. 上位計画・関連計画と歴史的風致の関係	2 4 2
(1) 第2次宇陀市総合計画	2 4 3
(2) 都市計画マスタープラン	2 4 4
(3) 宇陀市立地適正化計画	2 4 5
(4) 宇陀市観光基本計画	2 4 6
(5) 宇陀市空家等対策計画	2 4 7
(6) 宇陀農業振興地域整備計画	2 4 8
(7) 国指定文化財の保存活用（管理）計画	2 4 9
(8) 奈良県景観計画	2 5 3
(9) 奈良県と宇陀市とのまちづくりに関する基本計画	2 5 5
3. 基本方針及び実現のための方策	2 5 7
(1) 歴史的風致を形成する建造物及びその周辺環境に関する方針	2 5 7
(2) 歴史的風致を活かした観光振興に関する方針	2 5 8
(3) 歴史と文化の担い手やその活動に関する方針	2 5 9
4. 歴史的風致維持向上計画の実施体制	2 6 0
第4章 重点区域の位置及び区域	2 6 1
1. 重点区域の考え方	2 6 1
2. 重点区域の位置及び区域	2 6 2
(1) 歴史的風致の分布および重点区域の位置	2 6 2
(2) 重点区域の区域	2 6 3
(3) 重点区域の名称、面積	2 6 4
3. 重点区域の設定の効果	2 6 5
4. 重点区域における良好な景観の形成に関する施策との連携	2 6 5
(1) 都市計画との連携	2 6 5
(2) 奈良県景観計画	2 6 8

(3) 屋外広告物条例・	268
(4) 宇陀市松山伝統的建造物群保存地区保存計画・	269
(5) 室生赤目青山国定公園・	270
(6) 宇陀農業振興地域整備計画・	271
第5章 文化財の保存又は活用に関する事項・	272
1. 市町村全体に関する事項・	272
(1) 文化財の保存・活用の現況と今後の方針・	272
(2) 文化財の修理（整備）に関する方針・	273
(3) 文化財の保存・活用を行うための施設に関する方針・	273
(4) 文化財の周辺環境の保全に関する方針・	274
(5) 文化財の防災に関する方針・	274
(6) 文化財の保存及び活用の普及・啓発に関する方針・	275
(7) 埋蔵文化財の取扱いに関する方針・	275
(8) 教育委員会の体制と今後の方針・	275
(9) 各種団体の状況及び今後の体制整備の方針・	276
2. 重点区域に関する事項・	276
(1) 文化財の保存・活用の現況と今後の具体的な計画・	276
(2) 文化財の修理（整備）に関する具体的な計画・	277
(3) 文化財の保存・活用を行うための施設に関する具体的な計画・	277
(4) 文化財の周辺環境の保全に関する具体的な計画・	278
(5) 文化財の防災に関する具体的な計画・	279
(6) 文化財の保存及び活用の普及・啓発に関する具体的な計画・	279
(7) 埋蔵文化財の取扱いに関する具体的な計画・	280
(8) 各種団体の状況及び今後の体制整備の具体的な計画・	280
第6章 歴史的風致維持向上施設の整備又は管理等に関する事項・	282
1. 歴史的風致維持向上施設の整備又は管理等についての方針・	282
2. 歴史的風致維持向上施設の整備及び管理に関する事業・	283
○全体・	283
○各シート・	286
第7章 歴史的風致形成建造物の指定の方針・	304
第8章 歴史的風致形成建造物の管理の指針となるべき事項・	308

序章 計画策定にあたって

1. 計画策定の背景と目的

宇陀市は、奈良盆地の東縁にあたる山間地に位置し、古代から重層的に重なる歴史と、清らかな水と緑が織りなす自然環境が魅力的な地域である。主な産業は農林業が中心で、寒暖の差が激しく冷涼な気候を生かした農作物の生産が盛んである。また、吉野本葛や磨き丸太、毛皮革製品が特産品である。

宇陀市の歴史は古く、先史時代より人が暮らした跡が市内にいくつか分布する。『古事記』『万葉集』にも宇陀の地名が登場し、宮廷との関わりが深かったことが伺える。中世は興福寺の支配から国衆の支配となり、「伊勢本街道¹」の発達とともに有力者により城郭や居館が数多く築かれた。近世には豊臣氏の家臣が入封し、拠点となった秋山城や城下町の改変を重ねたのち、元和元年（1615）の破城以降は織田氏がこの地を治め、織田氏移封後は幕府の直轄領となった。以後、松山町は宇陀の中心地と位置づけられ、物資の集散地として賑わいをみせ、宇陀紙の卸、葛や薬種・薬苗の生産販売等で商家町として活況を呈した。一方で元禄期に真言宗に編入された室生寺は女人高野として参詣者を集めたほか、伊勢参詣者の増加に伴い、伊勢本街道沿道の宿場町は隆盛を極めた。近代に入ると、養蚕業や毛皮革産業が発展する。しかし、鉄道敷設や大型店舗の郊外進出、少子高齢化に伴い、人や物資の流れが変わって以降、街道筋の町場が停滞し始めた。古くから人が往来し、交通の要衝として賑わった歴史の面影を残す大宇陀町・菟田野町・榛原町・室生村の4町村であるが、平成の大合併によりひとつになり、平成18年（2006）に宇陀市となった。

平成20年（2008）に「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（平成20年法律第40号。以下、「歴史まちづくり法」）」が施行された。同法では、歴史的な建造物や伝承行事等、その地域固有の風情・情緒・佇まいといった良好な環境（歴史的風致）について、その維持及び向上を図るため市町村が実施する歴史・文化を活かした活力あるまちづくりを国が積極的に支援する制度である。

また、平成27年（2015）より奈良モデルの一環として進められた奈良県と市町村のまちづくりに関する連携協定に着手し、大宇陀・菟田野・榛原・室生の4地区でそれぞれ事業計画を検討してきたところ、大宇陀（宇陀松山周辺）・菟田野（古市場周辺）・室生（室生寺門前周辺）では歴史的建造物を活かした

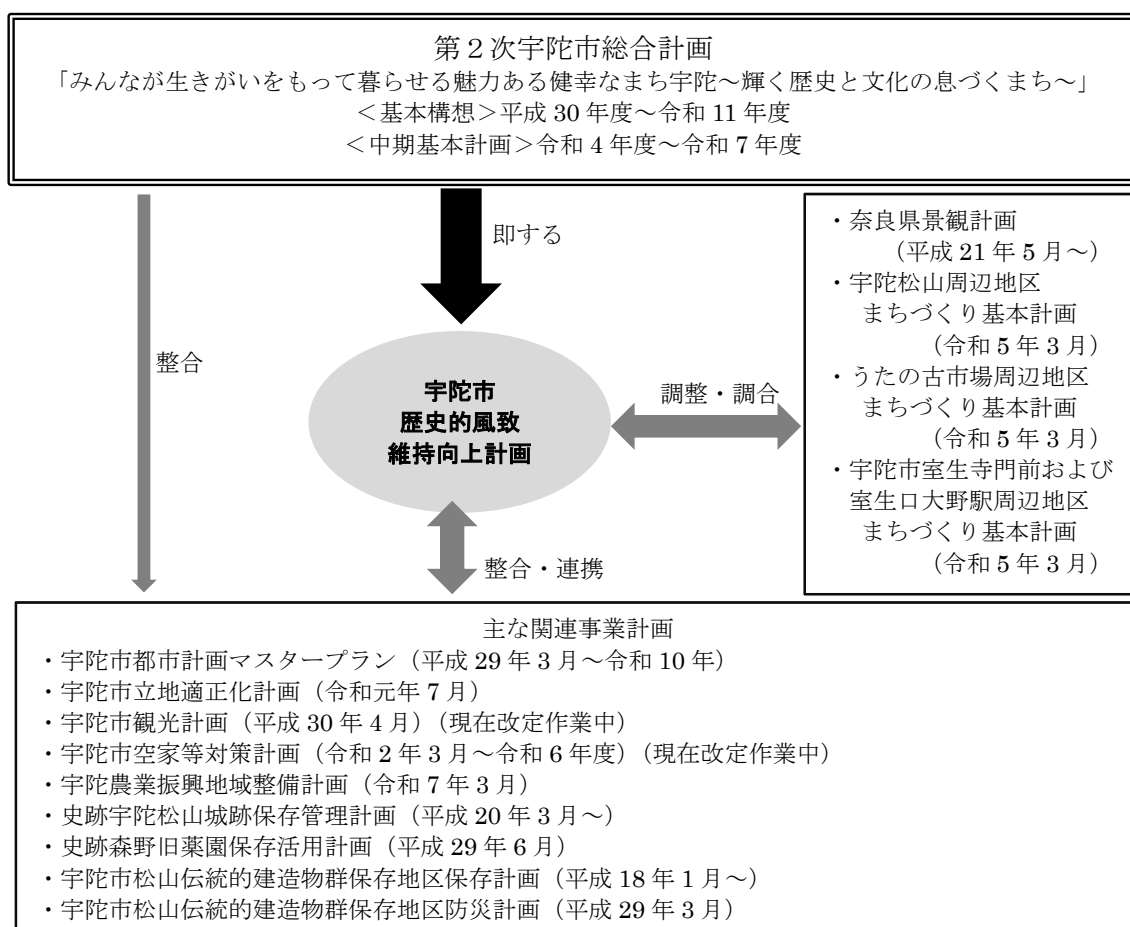
¹ 本計画書における「伊勢本街道」は、おおむね宇陀市内を通る伊勢本街道をさす言葉として使用している。（国史跡「伊勢本街道」（曽爾村）の区域とは異なる。）

事業が多くみられる傾向にあった。3つの地区にはそれぞれ核になる国指定文化財や重要伝統的建造物群保存地区（以下「重伝建地区」という。）があることから、歴史まちづくり法に基づき、歴史・文化と伝統に培われた人々の活動が根付く、良好な歴史的風致を貴重な資産と位置づけ、それらを核にした歴史まちづくりの基本的な指針を示し、歴史的風致の維持向上を図り、地域活性化を推進する「宇陀市歴史的風致維持向上計画」を策定することとした。

2. 計画の位置づけ

宇陀市固有の歴史的風致の維持向上を図るため、歴史まちづくり法第4条の規定による歴史的風致維持向上基本方針に基づき、同法第5条第2項の規定による事項を記載した宇陀市歴史的風致維持向上計画を策定する。

本計画を長期総合計画に掲げるまちの将来像実現に向けた計画のひとつとして、上位計画や県とのまちづくり連携協定等の事業に関連する計画と調整・調合を図り、各分野の歴史的風致に係る領域について、宇陀市における歴史・文化を活かしたまちづくりを推進するための計画として位置づける。なお、上位計画の内容など詳細は第3章にて記述する。



3. 計画期間

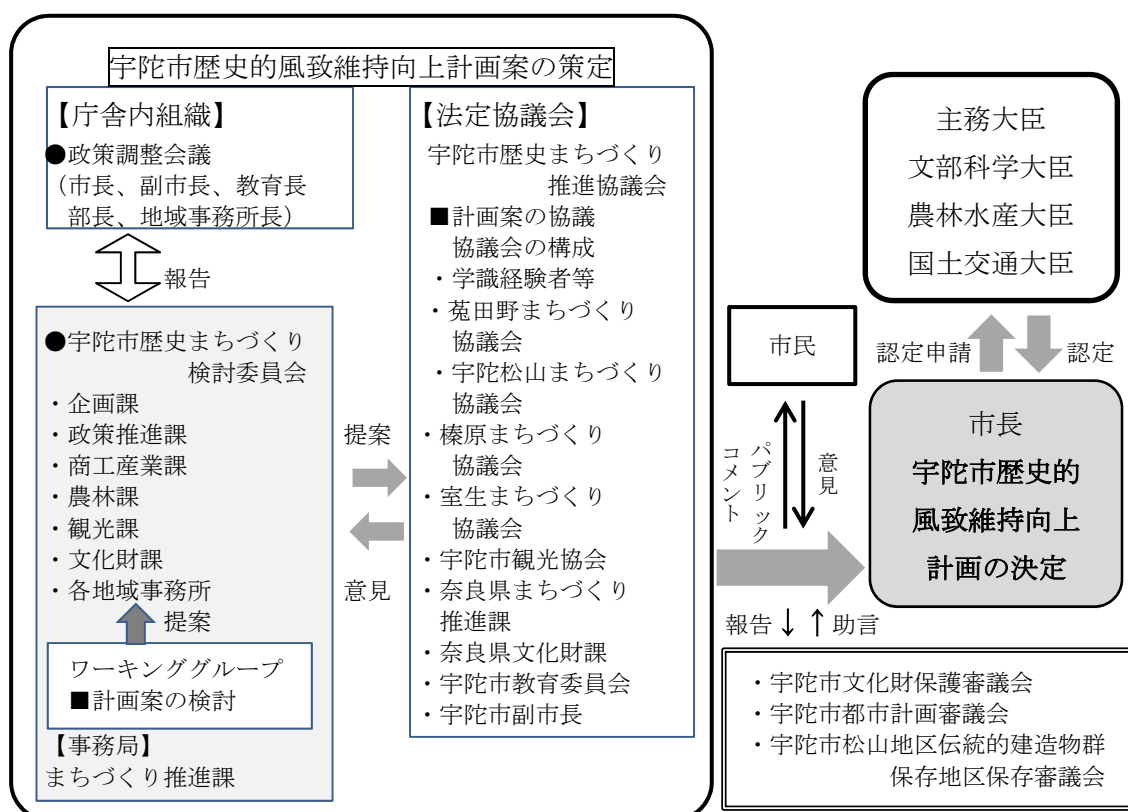
本計画の期間は、令和7年（2025）度から令和16年（2034）度までの10年とする。

4. 計画の策定体制

本計画は、文化財課（文化財保護）、観光課（地域資源等）、企画課（計画等）、まちづくり推進課（制度・企画・調整）で組織したワーキンググループおよび「宇陀市歴史まちづくり検討委員会」により原案の検討および施策・事業案等の検討を行い、文化財等の関係者、学識経験者等で構成する「宇陀市歴史まちづくり推進協議会（法定協議会。以下、「推進協議会」という。）」での意見を踏まえるとともに、関係機関（国・県）の助言等を受けながら策定した。

また、各種審議会の助言やパブリックコメントによる市民意見の聴取を経て「宇陀市歴史的風致維持向上計画」を策定している。

本計画の策定体制を下図に示す。



宇陀市歴史まちづくり推進協議会名簿

名前	所属団体・役職等	備考
小浦 久子	神戸芸術工科大学 教授	学識経験者
米村 博昭 ○	奈良県建築士会 会長	学識経験者
山本 雅則	奈良県文化財保護指導委員	学識経験者
都司 宗太郎	宇陀松山まちづくり協議会 会長	地元関係者
三崎 善司	菟田野まちづくり協議会 会長	地元関係者
田窪 重昭	榛原まちづくり協議会 会長	地元関係者
東 幸作	室生まちづくり協議会 会長	地元関係者
井上 源一 ◎	宇陀市観光協会 会長	地元関係者
山村 亜希	元宇陀市文化財保護審議会 委員	文化財等の関係者
奈良県県土マネジメント部まちづくり推進局 まちづくり連携推進課長		行政関係者
奈良県文化・教育・くらし創造部 文化財保存課長		行政関係者
宇陀市副市長		行政関係者
宇陀市教育委員会 教育長		行政関係者
近畿地方整備局 計画管理課長		オブザーバー

※任期 令和3年7月19日～令和5年7月18日 ◎…会長、○…副会長

名前	所属団体・役職等	備考
小浦 久子	神戸芸術工科大学 教授	学識経験者
米村 博昭 ○	奈良県建築士会	学識経験者
山本 雅則 (令和6年3月31日迄)	奈良県文化財保護指導委員	学識経験者
出口 茂一	宇陀松山まちづくり協議会 会長	地元関係者
三崎 善司	菟田野まちづくり協議会 会長	地元関係者
田窪 重昭	榛原まちづくり協議会 会長	地元関係者
東 義和	室生まちづくり協議会 会長	地元関係者
井上 源一 ◎	宇陀市観光協会 会長	地元関係者
山村 亜希	宇陀市文化財保護審議会 委員	文化財等の関係者
奈良県県土マネジメント部まちづくり推進局 まちづくり推進課長		行政関係者
奈良県地域創造部 文化財課長		行政関係者
宇陀市副市長		行政関係者
宇陀市教育委員会 教育長		行政関係者
近畿地方整備局 計画管理課長		オブザーバー

※任期 令和5年11月30日～令和7年11月30日 ◎…会長、○…副会長

5. 計画策定の経緯

- 令和元年 05 月 13 日 関係課長会議の開催
- 令和元年 05 月 27 日 政策調整会議にて歴史まちづくり計画策定を提案
- 令和元年 05 月 30 日 ワーキンググループ募集開始
- 令和元年 07 月 04 日 令和元年度第1回ワーキンググループ会議
- 令和元年 07 月 31 日 先進地視察（奈良市）

令和元年 08 月 08 日	令和元年度第 2 回ワーキンググループ会議
令和元年 11 月 11 日	令和元年度第 3 回ワーキンググループ会議
令和 2 年 02 月 13 日	令和元年度第 4 回ワーキンググループ会議
令和 2 年 06 月 02 日	令和 2 年度第 1 回ワーキンググループ会議
令和 2 年 10 月 06 日	令和 2 年度第 2 回ワーキンググループ会議
令和 3 年 01 月 13 日	令和 2 年度第 3 回ワーキンググループ会議
令和 3 年 04 月 14 日	令和 3 年度第 1 回ワーキンググループ会議
令和 3 年 07 月 01 日	令和 3 年度第 2 回ワーキンググループ会議
令和 3 年 07 月 05 日	令和 3 年度第 1 回 歴史まちづくり検討委員会
令和 3 年 07 月 19 日	令和 3 年度第 1 回 歴史まちづくり推進協議会
令和 3 年 12 月 24 日	令和 3 年度第 3 回ワーキンググループ会議
令和 4 年 01 月 06 日	令和 3 年度第 2 回 歴史まちづくり検討委員会
令和 4 年 02 月 24 日	令和 3 年度第 2 回 歴史まちづくり推進委員会
令和 4 年 04 月 22 日	令和 4 年度第 1 回ワーキンググループ会議
令和 4 年 06 月 07 日	令和 4 年度第 2 回ワーキンググループ会議
令和 4 年 07 月 15 日	先進地視察（伊賀市）
令和 4 年 11 月 14 日	令和 4 年度第 3 回ワーキンググループ会議
令和 6 年 1 月 11 日	令和 5 年度第 1 回歴史まちづくり推進協議会
令和 6 年 1 月 25 日	令和 5 年度第 1 回ワーキンググループ会議
令和 6 年 2 月 13 日	令和 5 年度第 1 回歴史まちづくり検討委員会
令和 6 年 2 月 22 日	政策調整会議にて報告
令和 6 年 3 月 27 日	宇陀市都市計画審議会にて報告
令和 6 年 5 月 1 日～5 月 30 日	パブリックコメントの実施
令和 7 年 1 月 17 日	文化財保護審議会委員より意見聴取
令和 7 年 3 月	令和 6 年度第 1 回歴史まちづくり推進協議会（書面決議）
令和 7 年 4 月	認定申請提出

第 1 章 歴史的風致形成の背景

1. 自然環境

(1) 位置

宇陀市は奈良県の北東部に位置し、北は奈良市、山添村、西は桜井市、南は吉野町、東吉野村、東は曾爾村、三重県名張市に接している。市の総面積は 247.5 km²で、県全体の 6.7%を占めている。平成 18 年（2006）の町村合併によりひとつになった。

宇陀市を横断するように近鉄大阪線が走り、榛原駅から大阪へは急行電車で約 1 時間、名古屋へは特急電車で約 2 時間の立地にある。



宇陀市の位置（出典：第 2 次宇陀市総合計画）



(2) 地形・地質

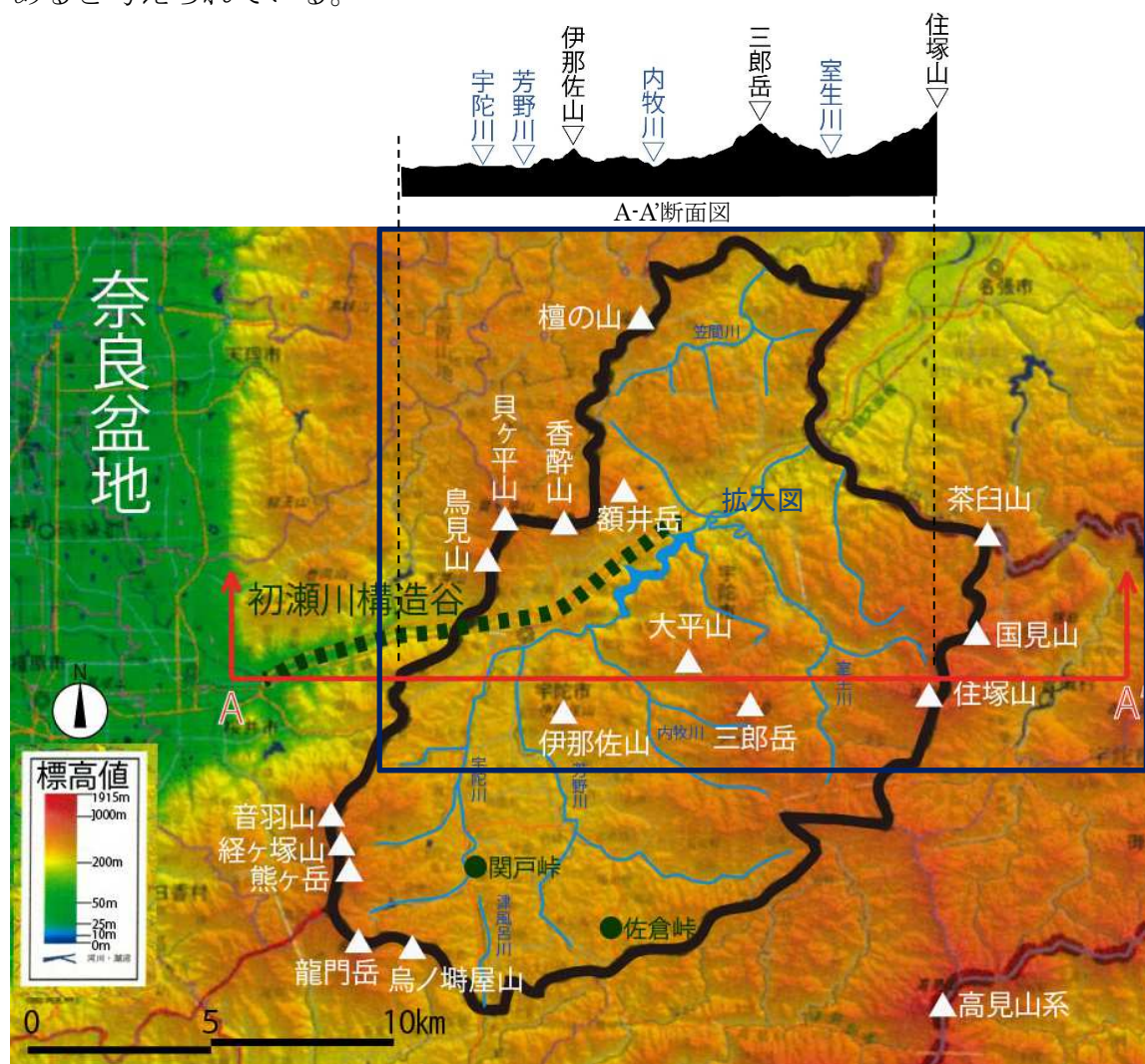
四方を山で囲まれた宇陀市の北辺は、初瀬川構造谷から榛原地域を経て伊賀へと続く構造谷（近江伊賀大断層）が走り、断層崖により北の大和高原と画される。この断層崖は鳥見山・貝ヶ平山・香酔岳・額井岳と屏風状に連立する山塊群を形成する。

西辺には音羽山・経ヶ塚山・熊ヶ岳・龍門岳などの龍門山地がそびえ立ち、奈良盆地との境をなし、東は先の高見山系で伊勢地域と隔絶される。そして南は関戸峠・佐倉峠が吉野川水系との分水嶺となり、「中央構造線」の谷で吉野と接する。

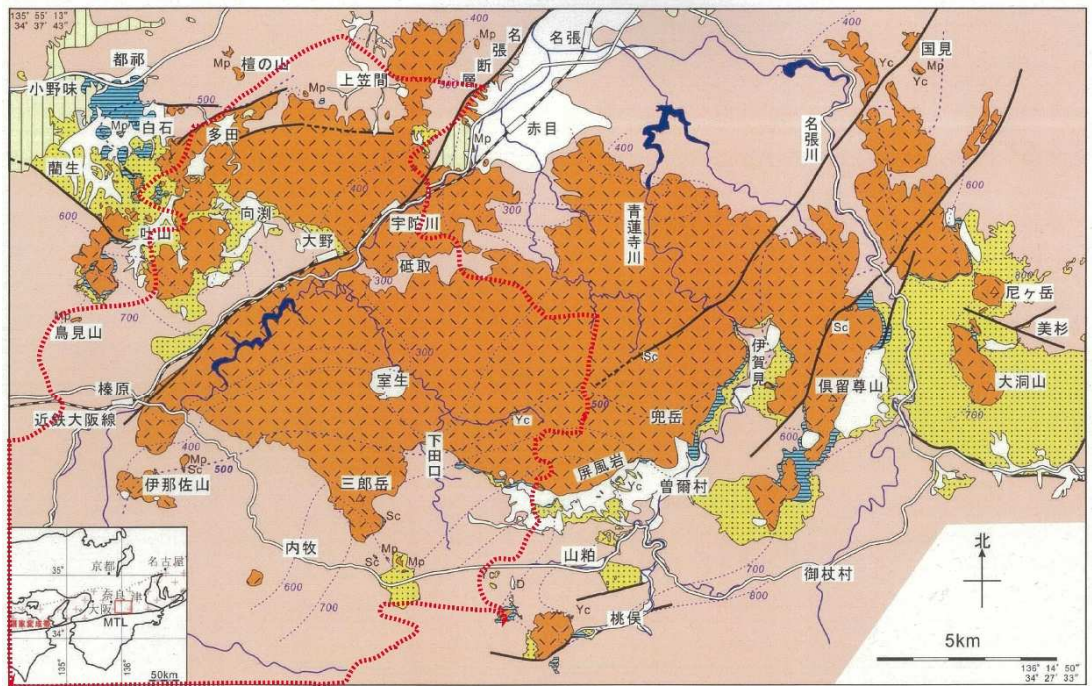
こうした四周の山々からは幾本もの尾根筋や丘陵が樹枝状に分岐し、その支脈間の谷筋から流れ出す幾多の小支流を集めながら宇陀川・芳野川・内牧川の主

要河川が縫うように北流する。これらの河川流域には、小規模な開析谷や小盆地^{かいせきこく}が回廊上に連なる口宇陀特有の景観が生み出される。この回廊は、西は大和国中へと通じ、東へたどれば伊勢から東海へ、北は伊賀・近江へ、南へ向かえば吉野・熊野へというふうに、それぞれの地域を結ぶ結節部のような空間を構成する。標高は 300～700m と落差が大きい。

また、宇陀市の東部に広がる室生山地とその周辺は、約 1400 万年前に起こった大規模な火山活動により火山灰などの噴出物が堆積したのち（これを「室生火砕流堆積物」という。）、隆起や浸食を繰り返して形成された地形である。溶結（火山から噴出して堆積した直後に、火山灰に含まれる天然ガラスが高熱のためくっつきあう現象）しているため冷えると固い岩石ができるが、冷える過程で体積が縮むため「節理」という割れ目が縦方向に多数入っている。室生寺周辺の凸型の地形は、川の蛇行に沿って浸食が進み、凝灰岩が崩落を起こしてできたものであると考えられている。



標高地形図（出典：デジタル標高地形図（平成 24 年 5 月 国土地理院）



室生火砕流堆積物の分布（出典『地質学雑誌 第118巻 補遺』「中新世の室生火砕堆積物」55頁）

（3）河川

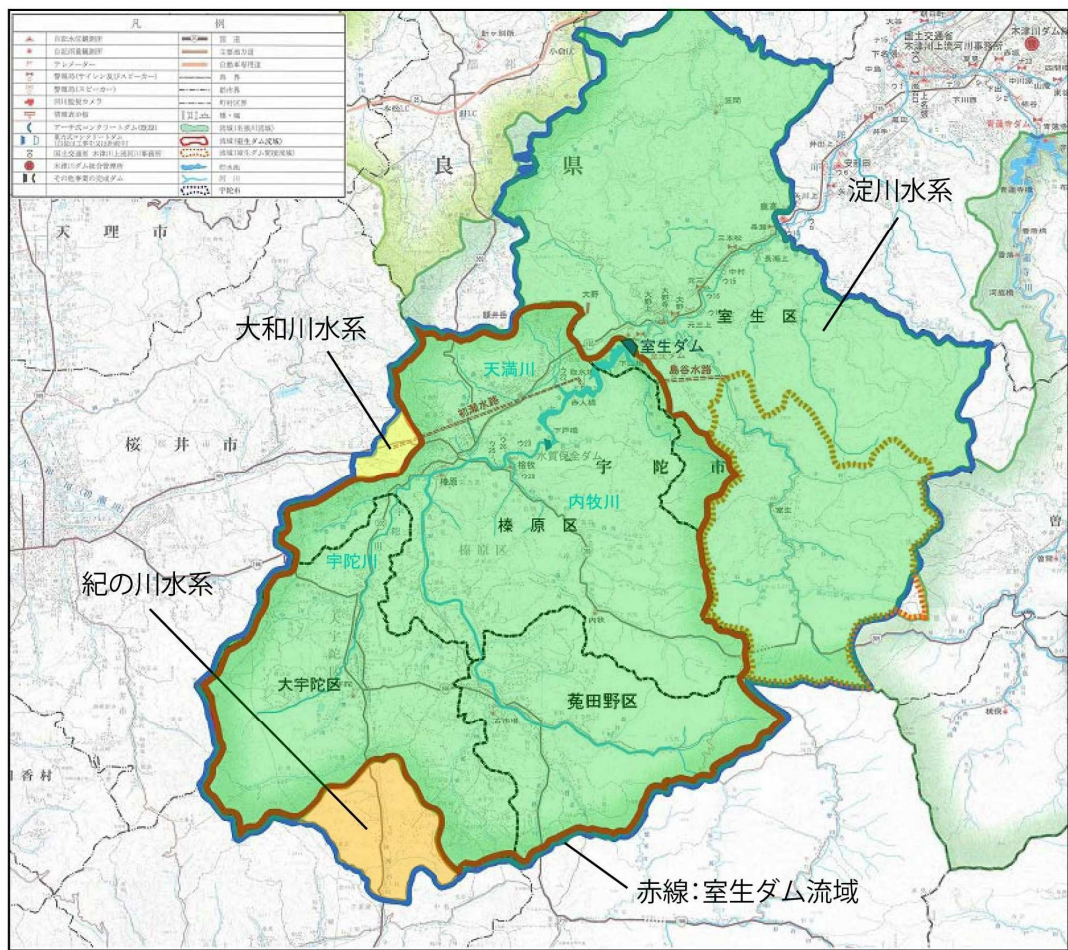
山に囲まれた宇陀市には淀川水系、紀ノ川水系、大和川水系と3つの流域界がある。市内の大部分を占める淀川水系では各支流の水を集めながら宇陀川が南から北東へ向かって流れ、名張川・木津川を経て大阪湾へと流れる。紀ノ川水系は大蔵川・栗野川・田原川が南に流れて津風呂川に合流し、吉野川から紀ノ川へと注ぐ。奈良盆地を流れる大和川水系は吉隠川が西を流れて初瀬川に合流し大和川に注ぐ。

紀ノ川水系の大蔵川・栗野川・田原川流域は上龍門村にあり、もとは吉野郡に属していたが、昭和17年（1942）の町村合併で大字陀町となった。

また、大和川水系の吉隠川流域は、かつて朝倉村（現桜井市）に属していた安田と笠間が昭和29年（1954）、初瀬村（現桜井市）に属していた柳と角柄は昭和44年（1969）に榛原町と合併した。

いずれも水系が異なるだけで、地勢・経済・教育に宇陀と密接な関係があり人情・風俗等も類似する、生活圏が宇陀市内にあり交通も桜井に属するより利便性が高いなどの理由で、住民の強い意向により編入がおこなわれた²とある。こうした行政区域の変遷が、流域界と市境の線を重ねると浮かび上がってくる。

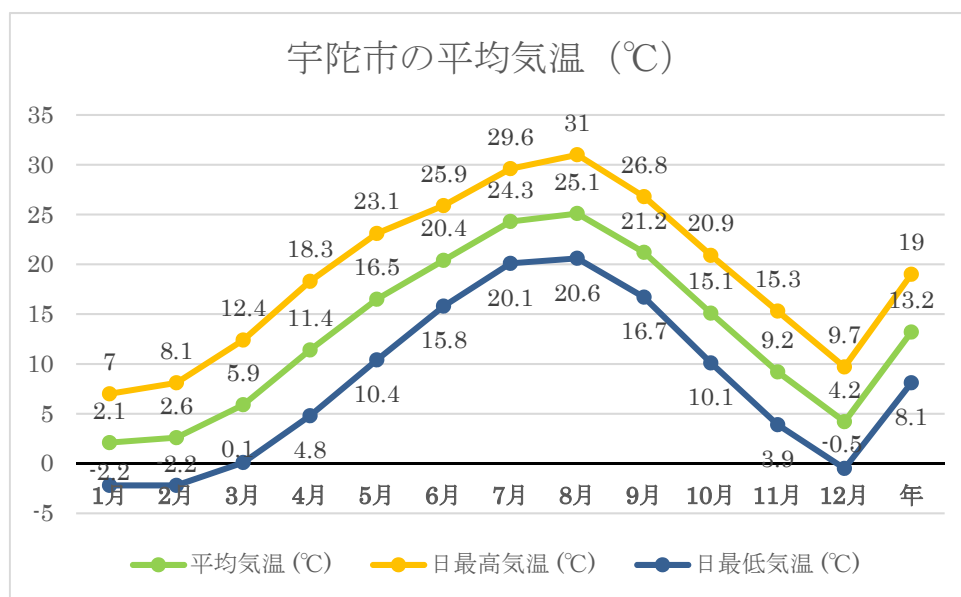
² 『榛原町史 本編』（平成5年（1993）3月/榛原町史編集委員会 編）72頁



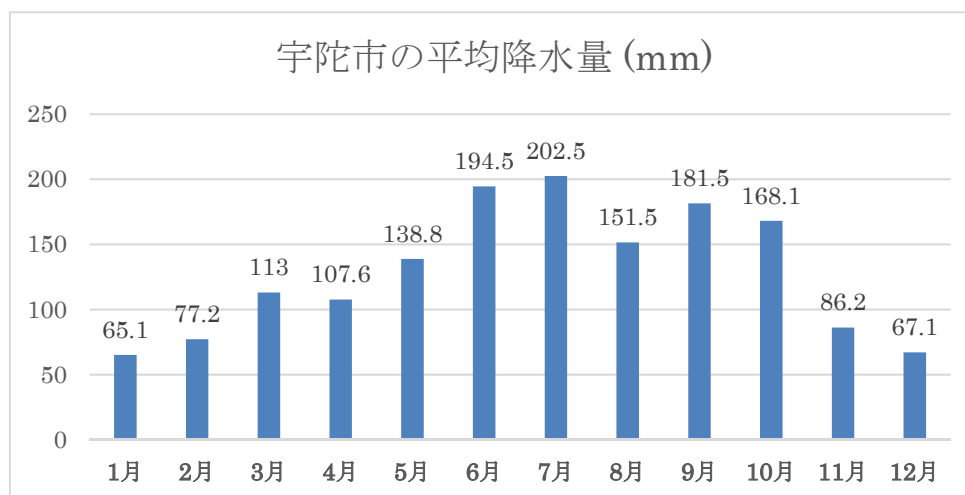
宇陀市内の流域界（出典：『室生ダム定期報告書』）

(4) 気象

宇陀市の気候は内陸性気候で、冬は季節風の影響を強く受けるため寒さが厳しい一方、夏は冷涼で過ごしやすい。令和3年(2021)の測定値を見ると、降水日数が多く、年間降水量は約1,600mmになる。平成3年(1991)から令和2年(2020)の平均値で、年間の最高気温は31.0度、最低気温は-2.2度、雨は梅雨期と台風の時期に多く6月、7月で約200mm、最も少ないのは1月の65.1mmである。



平成3年(1991)～令和2年(2020)の宇陀市の平均気温



平成3年(1991)～令和2年(2020)の宇陀市の平均降水量

2. 社会的環境

(1) 市域の変遷

古代より、宇陀市域は曾爾村・御杖村とともに宇陀郡として扱われる期間が長かった。

近世以降、奈良県内に暮らす人は奈良盆地を「国中（くんなか）」と呼び、その東の山間部は「山中（さんちゅう）」と呼んだ。「国中」の東、「山中」の南に位置するのが「宇陀」で、現在の行政区画では宇陀市（大宇陀・菟田野・榛原・室生）、曾爾村、御杖村からなる。

ひとことに「宇陀」と称されるが、その地勢から東西にわかれる。宇陀市でも大宇陀・菟田野・榛原・室生を「口宇陀（盆地）」、曾爾村・御杖村を「奥宇陀（山地）」とよぶ。また、室生の小原・上笠間・下笠間・深野・染田・多田・

無山）は「東山中」に含まれ、昭和 30 年（1955）に室生村と合併するまでは山辺郡に属していた。

現在の宇陀市域には、町村制が敷かれた明治 22 年（1889）の段階で、14 町村があったが、何度かの町村合併を重ねている。平成の大合併では曾爾村・御杖村も加わった合併協議に取り組んだが合併には至らず、大宇陀町・菟田野町・榛原町・室生村の 4 つの町村で再度合併協議を行い、平成 18 年（2006）に対等合併をした。このときに合併特例法に基づく地域自治区制を時限導入し、旧町村はそれぞれ大宇陀区、菟田野区、榛原区、室生区となった。平成 23 年（2011）3 月 31 日で設置期限を迎えたため地域自治区は廃止され、現在の姿となった。



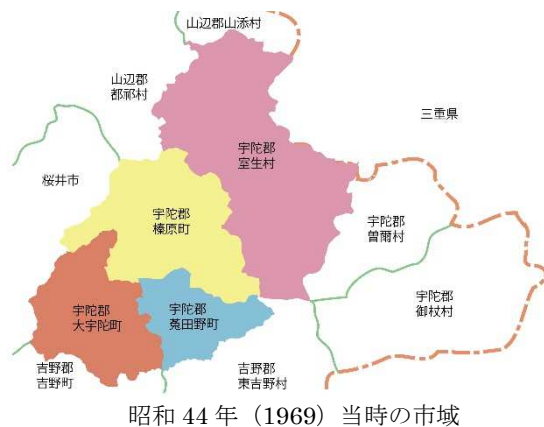
奈良県各地の呼称
（『奈良県史 1 地域史・景観』を参考に作成）



明治 22 年（1889）当時の市域



昭和 30 年（1955）当時の市域



(2) 土地利用

市の大半が山林で、全体の70%以上を占めている。平野部は田畑や建物用地であるが、昭和51年(1976)から平成26年(2014)の間に、宅地開発等により建物用地が増加していることがわかる。

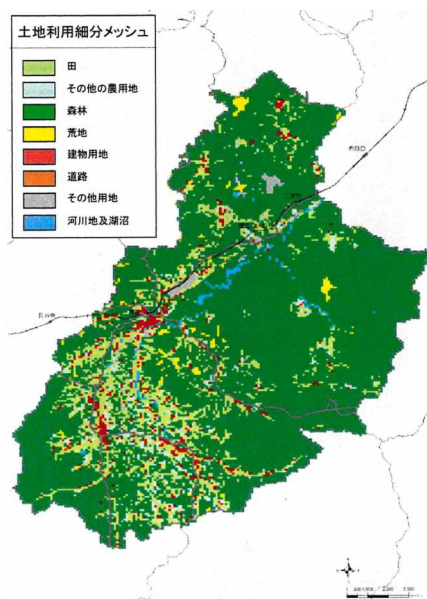


図 土地利用状況 (S51)

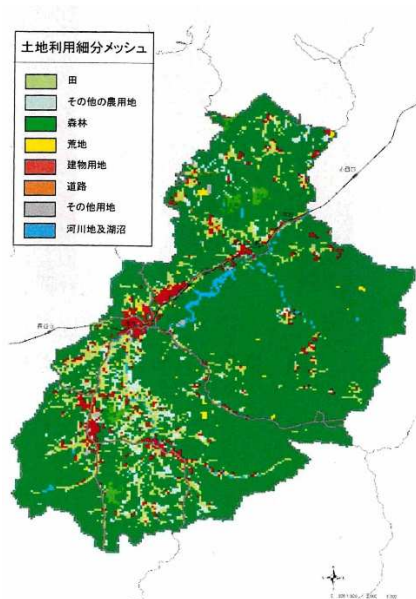
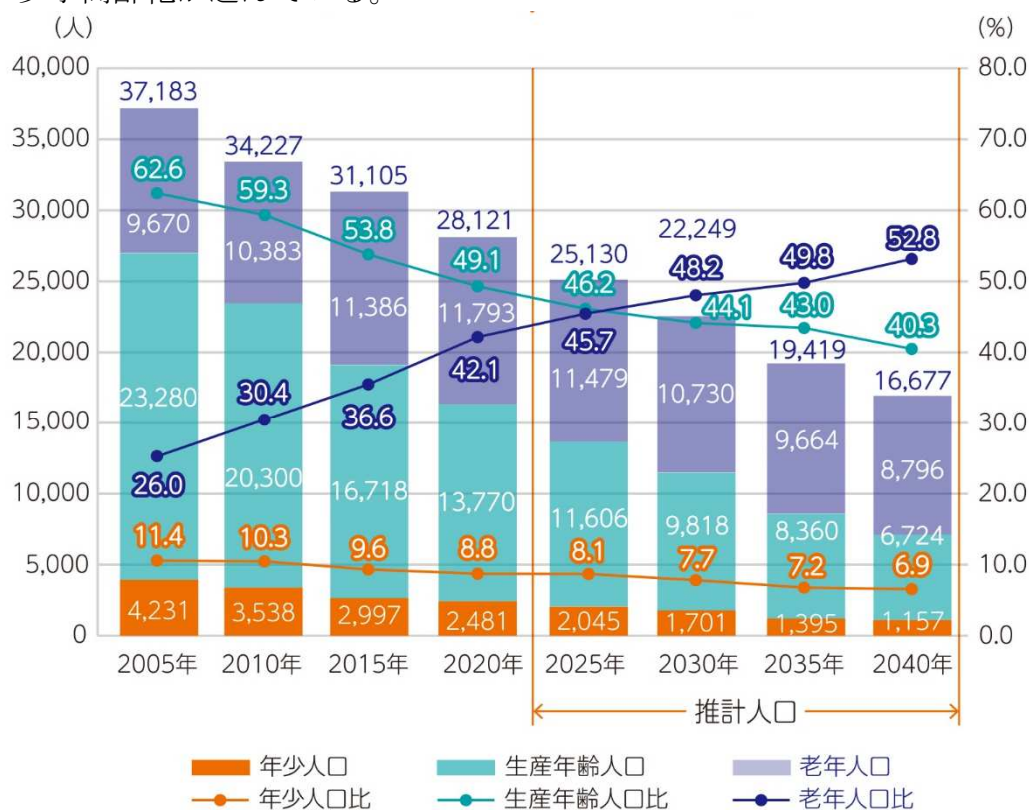


図 土地利用状況 (H26)

(出典：立地適正化計画より)

(3) 人口動態

宇陀市の人口は、平成7年（1995）の約41,900人をピークに減少し、令和2年（2020）には約28,100人となった。また、年齢3階層別にみると老年人口（65歳以上）の占める割合が増大し、令和2年（2020）には約42.1%となっている。一方で年少人口（15歳未満）の占める割合は縮小し令和2年（2020）は約8.8%と、少子高齢化が進んでいる。



宇陀市の人口推移予測（第2次宇陀市総合計画より）

本市の出生数と死亡数についてみると、近年は死亡数が出生数を上回る状態が続いている。合計特殊出生率についてみると、平成25年（2013）度には0.90と直近で過去最低値だったが、令和元年（2019）度で0.96と回復傾向にある。しかし依然として1.00前後を推移しており、全国平均（1.44）や奈良県平均（1.27）よりも低くなっている。

転入者数と転出者数を見ると、転出者数の方が転入者数よりも多い転出超過の状態が続いている。近年は転入者数が増加し、社会動態（転入者数－転出者数）は改善傾向にある。



(4) 交通機関

主要な交通網は、鉄道は近鉄大阪線が東西に横断し、榛原駅、室生口大野駅、三本松駅の3駅が立地し京都・大阪方面や名古屋・伊勢方面にアクセスできる。バスは奈良交通・市営有償バス、過疎地有償バス、コミュニティバス、デマンド型タクシーが運行している。榛原駅を発着点としたバス路線網が曽爾村・御杖村・東吉野村へ広がり、奥宇陀・東吉野への玄関口としての役割を果たしている。

自動車では最寄りにある名阪国道針 IC と大阪松原 JCT（西名阪自動車道）とが約1時間で結ばれる距離にある。また、市内の国道は165号、166号、369号及び370号が通り、県内の隣接市町村や三重県名張市につながる他、主要地方道や市道により市内各地域を繋いでいる。

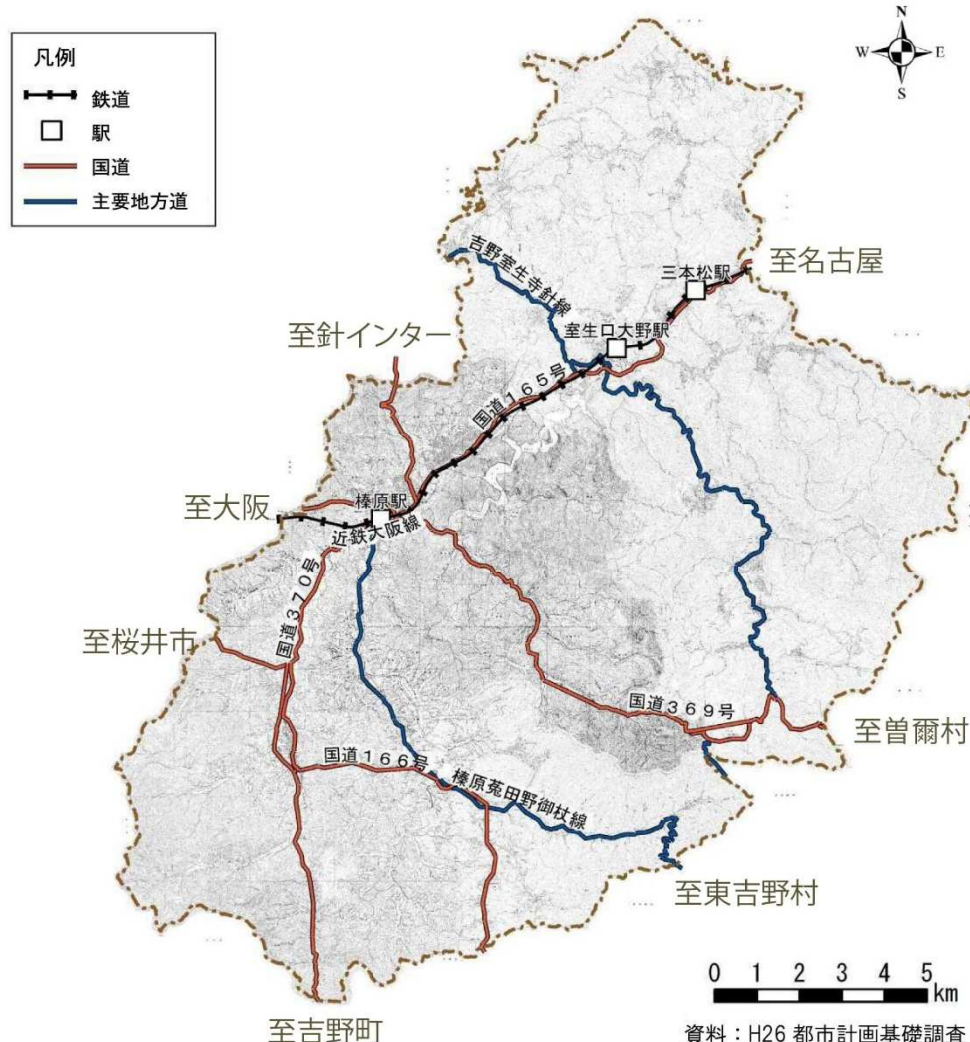


図 交通体系図

(出典：宇陀市都市計画マスタープラン)



図 市内の施設分布と交通ネットワーク（令和3（2021）年3月時点）

（出典）宇陀市地域公共交通計画（令和3（2021）年3月）

注1) 大宇陀南部線は、令和3(2021)年12月よりかぎろひバスとして運行している。
 注2) らくらくバスは、令和5(2023)年10月に廃止され、同年11月より菟田野地域におけるタクシー利用補助を行っている。

(5) 産業・観光

宇陀市は、農業や林業を中心とした産業構造になっている。農業では夏でも冷涼な気候と昼夜の寒暖差が大きいことを活かした米や茶（大和茶）の生産が盛んである。このほか、ダリアやごぼう、吉野本葛が特産品である。

林業では、住宅用の木材を産出するほか、磨き丸太が特産品となっている。また、製造業では毛皮革生産が世界的に知られており、市内で皮のなめしから加工・縫製・販売までを一貫して行える体制をもっている。特に鹿皮については全国シェアの95%以上、毛皮についても45%のシェアを誇っている。



吉野本葛



大和茶



磨き丸太

産業別従事者の状況についてみると、第1次産業や第2次産業の従事者数が年々減少しており、農林業等の担い手の減少を示している。第二次宇陀市総合計画を策定するにあたり、地元の事業者や担当課の職員を対象に実施したヒアリング調査等によると、農林業以外の産業についても担い手が減少していることがわかっている。特産品のひとつである毛皮革に関しては、過去に約100社あった事業所が現在は約30社になり、毛皮革産業の担い手も減少している。

宇陀市の労働力人口（就業している、もしくは休業・休職中の15歳以上人口）は減少傾向となっている。その内訳をみると、将来の宇陀市を担う生産年齢（15歳以上65歳未満）の人口が減少している一方、老年人口（65歳以上）は増加している。

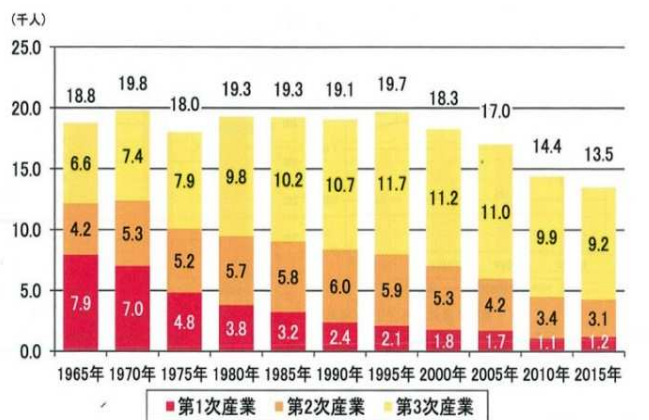


図 産業別従事者の割合の推移

資料：国勢調査（各年）

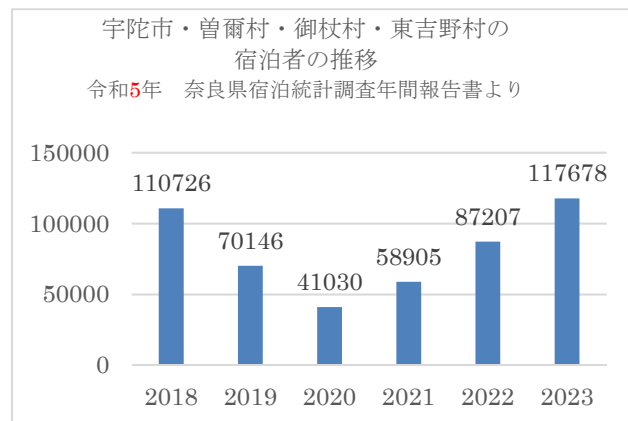


図 労働力人口の内訳の推移

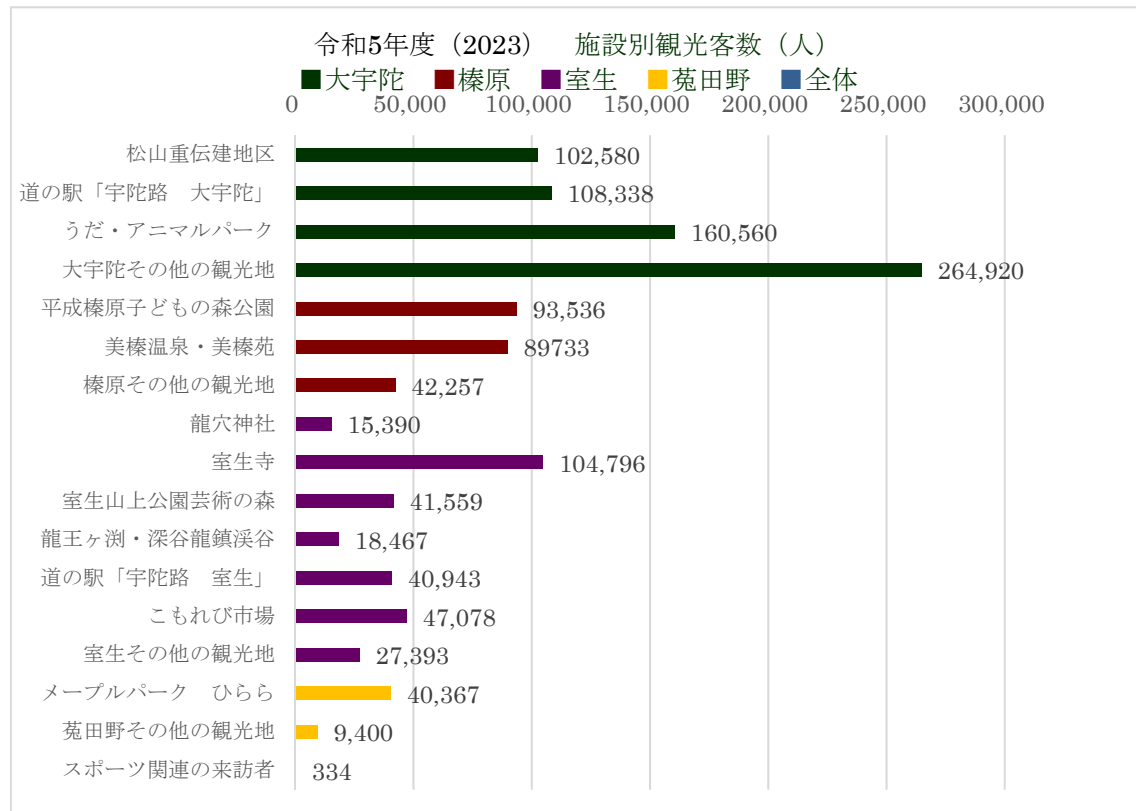
宇陀市は、室生赤目青山国定公園や又兵衛桜、佛隆寺のサクラの巨樹（千年桜）などの優れた自然景観や、盆地に広がる水田と里山が織りなす田園風景、室生寺・宇太水分神社などの国宝建造物、重伝建地区に選定された宇陀松山の歴史的な町並みといった豊富な観光資源を有しており、観光客数は増加傾向にある。

観光入込客の推移をみると、平成30年度（2018）で約140万人が宇陀市を訪れている。地区別でみると大宇陀の占める割合が最も多く、室生・榛原・菟田野と続いている。令和元年（2019）以降はコロナ禍の影響で減少が著しいが、令和5年（2023）の宿泊者をみるとコロナ禍以前の数値まで回復した。

観光入込客数の推移



観光入込客数の推移（第二次宇陀市総合計画より） 宇陀市・曾爾村・御杖村・東吉野村の宿泊者の推移



令和5（2023）年度 施設別来訪者数



室生赤目青山国定公園（吉祥龍穴）



又兵衛桜



佛隆寺のサクラの巨樹（千年桜）（県天然記念物）



片岡家住宅（重要文化財）



女人高野 室生寺 五重塔（国宝）



うだぬくまりじんじや
宇太水分神社本殿（国宝）



宇陀松山（重伝建地区）松山通り



龍王ヶ淵



室生山上公園

3. 歴史的環境

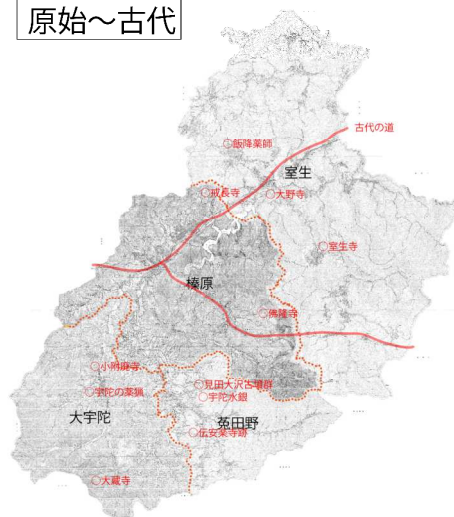
(1) 歴史的背景

ウダは古来より宇陀・宇田・宇陀・雨多・宇太などと表記し、現在もウタ（宇太）・ウダ（宇陀）と発音する。『日本古語大辞典』（平成8年（1996）松岡静雄編）によると、ウタはウ（大）タ（田）で、広い台地を意味する古語である。アタ（阿田、阿多、阿陀）と同義語で一種の地形語と考えられている。

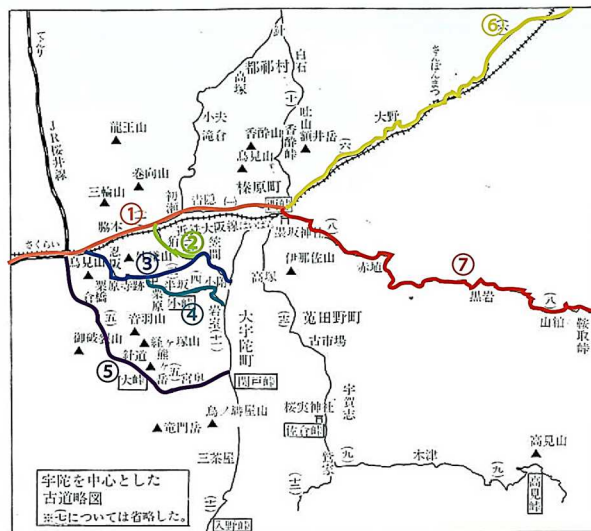
宇陀の地は、古代政権の所在地であった国中（奈良盆地）に隣接し、そこから伊賀・伊勢を経て東国に通じる経路として重要な位置を占めていたことや、神仙境と認識された吉野や大和高原・甲賀・鈴鹿などを結ぶ山の道との交差点ともなる交通上の要地としての性格を持っていたことがあげられる。これらの様子から、山間部でありながら古代より政権の影響を敏感に反映しながら歴史を形成してきた地域であったことを最初に認識しておきたい。

【①原始～古代】 大和と宇陀を結ぶ道

原始～古代



本文中登場する物件の位置図



宇陀を中心とした古道略図

国中と宇陀を結ぶ道は、①西峠を越える道、②初瀬川の支流である粕川をさかのぼり、桜井市下岩坂、同粕を経て榛原笠間に至る道、③栗原川の北側をとって、女寄峠から榛原笠間に至る道、④栗原川南側を通り、桜井市栗原から小峠を越え、大宇陀半阪に至る道、⑤桜井市針道から大峠を越え大宇陀宮奥に至る道などがある。

一方、⑥榛原萩原^{はぎはら}から名張市を経て伊賀市に至る道、名張から東進し青山峠を越え伊勢に至る道、⑦曾爾を経て伊勢に至る道が伸び、西側から伊賀・伊勢方面に抜ける道の存在も『古事記』『日本書紀』（以下、「記紀」という）でみられる。

宇陀は山間部にありながら、四周の地域と結ばれ、記紀・万葉のころから鉄道が通るまでは交通の要衝であった可能性が高い。そのためこれらの道が地域を発展させてきたことが推察できる。

現在のところ口宇陀地域では、詳細な経緯は不明だが、宇陀川の底から有茎^{ゆうけい}尖頭器^{せんとうき}が発見された（口宇陀地域では4例の出土例がある）。旧石器時代から縄文時代への過渡期にあたる時期から人の営みがあったことが確認できる。

弥生時代の遺跡は縄文遺跡と比べて遺跡の分布が異なり、丘の上や山裾などで日照が良く水の得やすい土地に住居を営み、その下の水の引き込みやすい所に家族単位で開墾可能な小区画の水田を開き、「ムラ」単位ほどの協同で生産地として徐々に拡大した状況が遺跡から読み取れる。自然環境の厳しい山間部であるため、同じ場所で集落を営み続ける傾向がみられ、国中でみられるような大規模集落は形成されていない。特に榛原地域は、平地に狛路池^{かりじのいけ}があり、湿地帯をさけた高台で暮らしていた。



見田・大沢古墳群 史跡指定範囲



見田・大沢4号墳 四獣形鏡・玉類

弥生時代から古墳発生期の移り変わりを考える上で、見田・大沢古墳群^{み た おおさわ}が重要な位置づけにあるが、中でも1号墳と呼ばれる変形の前方後円墳が着目されている。また、殆どの方形台状墓が棺内に副葬品を持たないのに対し、見田・大沢古墳群では、鏡、玉類、剣などの鉄製品が出土し、優れた遺物構成となっている。

口宇陀地域では、武器・武具を豊富に副葬する古墳が5世紀後半の時期に集中する。群集墳に含まれる小規模な古墳に豊富な武器を副葬するのは、葬られた人たちが武人であったことを示しており、ヤマト政権を支える軍事集団を構成していたと想定できる。

また、朝鮮半島や中国大陆からの移住や交流は頻繁にあったと考えられており、特に5世紀～7世紀にはその痕跡が数多く認められる。韓式系土器^{かんしき}、新羅系土器^{しらぎ}や

釵子^{さいし}、小型炊飯具などが出土しており、渡来系氏族が居住していたことが推定できる。

7世紀後半になると古墳の営造が見られなくなるが、既存の古墳への追葬や、再利用して墓地にする状況が見られる。飛鳥・奈良・平安初期には、火葬骨を各種の蔵骨器に納入して埋葬する火葬墓が現れる。

う だ の くすりがり 宇陀野の薬猟

口宇陀地域は交通や軍事上の要衝であり王権の影響力をきわめて受けやすかった。4世紀代から5世紀代前半までに菟田^{あがた}県が設置され、菟田^{あがたぬし}県主は主水^{もひとり}部として王権に奉仕し、氷や聖なる水を献上したと考えられる。

宇陀は5世紀代後半には軍事的前進基地ともいえる性格を帯びるようになった。また、山野には数多くの鳥獣が生息し格好の狩猟^{とりかい}の場となり、鳥養部^{ししひと}や宋人部^べ³が設置された。宇陀への狩猟が史料で確認できる最初の事例は、『日本書紀』推古天皇19年(611)5月5日の薬猟である。(詳しくは第2章P187にて紹介する。)

宇陀水銀

宇陀が水銀の特産地であったことは、『万葉集』に「倭の宇陀の真赤土のさ丹着かばそこもか人の吾を言なさむ」と歌われていることからわかる。真赤土は真赭^{まそほ}、丹砂^{たんしゃ}、朱砂^{すさ}、辰砂^{しんしゃ}とも称された。その成分は硫化水銀で、蒸留すれば水銀を得ることができる。奥田^{おくだ}尚氏^{ひさし}(「水銀鉍の産地」、『奈良県立橿原考古学研究所彙報 青陵』第73号、平成2年(1990))によると、奈良県下にはかつて21箇所の水銀鉍山があり、大宇陀地域・菟田野地域で15箇所を占め、宇陀市との境に接する桜井市の多武峰^{とふのみね}地区に5箇所とあるので口宇陀地域は水銀の宝庫であった。

さらに、大和水銀鉍山では、十谷斜坑の三番樋に旧坑があり、奈良時代頃の須恵器が残されていたという。

口宇陀地域における古墳文化の継続性、質の高さ、各地域との交流を考える際、宇陀の各地で産出した辰砂は比類のない重要性を持つ。宇陀が王権との関係性



水銀鉍石(菟田野分館 所蔵)

³ 鳥養部は、大化の改新以前に朝廷の求めに応じて鳥類の捕獲・献上・飼育・養育をする職のこと。宋人部は、鳥獣の肉を料理する職のこと。

が強かった背景に、宇陀の辰砂が介在していた可能性が高い。また、『古事記』『日本書紀』『万葉集』には、宇陀の地名がたびたび登場する。詳細については第2章にて触れるが、記紀にある神武伝承では熊野・吉野・宇陀・国中が舞台となっている。『万葉集』においても、阿騎野の遊獵や宮廷行事等、様々な営みの中で紡がれたものである。宇陀が記紀・万葉の舞台となりえたのは、国中に接する地域で常に国中の影響下にあり、交通の結節点ゆえ情報が集まるところで、前述のように辰砂や地下に埋蔵される水銀が富の源泉となっていた⁴ことが要因と考えられる。

宇陀をめぐる信仰

宇陀地域では神仙思想に関する記述がたびたびみられる。神仙思想とは古代中国でうまれたアニミズム（精霊崇拜・靈魂信仰）の一種で、深山幽谷で修業をし、仙薬を飲めば不老不死の仙人になれるとの思想のことである。中国の本草書



駒帰廃寺

『本草経集注』⁵には水銀に神仙・不死の効用を示している。水銀を含む辰砂は漢方薬の材料だが、水銀には毒性があるためそのまま摂取することは敬遠され、地下に水銀鉱床の存在する地域の水を飲んだり水浴をしたり、またその山野にいる動植物を食べることで、間接的に水銀を摂取しうると考えられた可能性がある。『日本霊異記』の上巻第十三話⁶に、次のような説話が残る。

「宇太郡の漆部里に暮らすある女が、山野で野草を摘み慎み深く食事する日々を過ごしていた。孝徳朝の甲寅の年に彼女の風流が神仙の心に通じ昇仙して空を飛んだ」という内容である。あくまで説話であるが、水銀鉱床が多くある宇陀の地域が、7世紀代に神仙思想と深く結びつけられていた事実を示している。

⁴ 辰砂は赤い色から朱砂、純度の高いものは丹と呼ばれ、建物の装飾をする際に使う顔料や漢方薬の材料として重宝されていた。

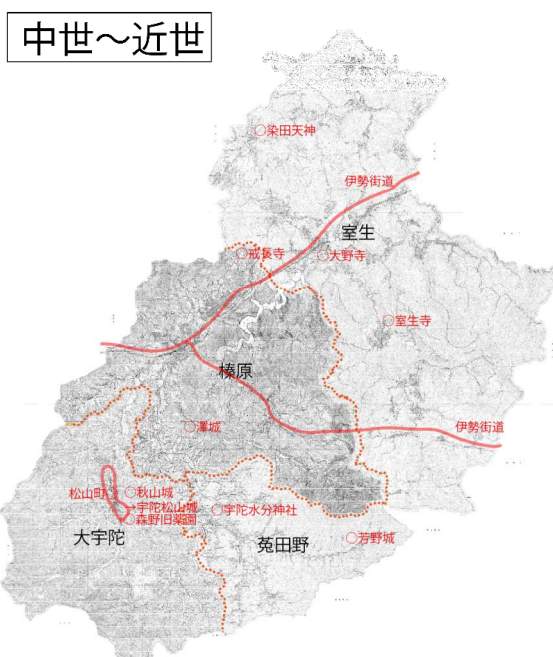
⁵ 南北朝梁時代の道士、陶弘景（陶隱居とも称す、456年生～538年没の代表的な本草書である『神農本草経』3巻に自注を加えた『神農本草経集注』7巻の略称）

⁶ 「大倭の国宇太の郡塗部の里に、風流ある女有り。是即ち彼の部内の塗部造麿が妾なり。天年風声を行とし、自性塩醬を心に存す。七の子を産生む。極めて窮しくして食无く、子を養ふに便无く、衣无く藤を綴る。日々沐浴みて身を潔め綴れを著る。毎に野に臨み草を採るを事とし、常に家に住み家を浄むるを心とす。菜を採り調へ盛りて、子を唱び端坐して、咲を含み馴れ言ひて、敬を致して食ひ、常に是の行を以て身心の業とす。彼の気調恰も天上の客の如し。是に難破の長柄の豊前の宮のときに、甲寅の年、其の風流の事、神仙感応し、春の野に菜を採り、仙草を食ひて天に飛びき。」（日本古典文学大系『日本霊異記』）

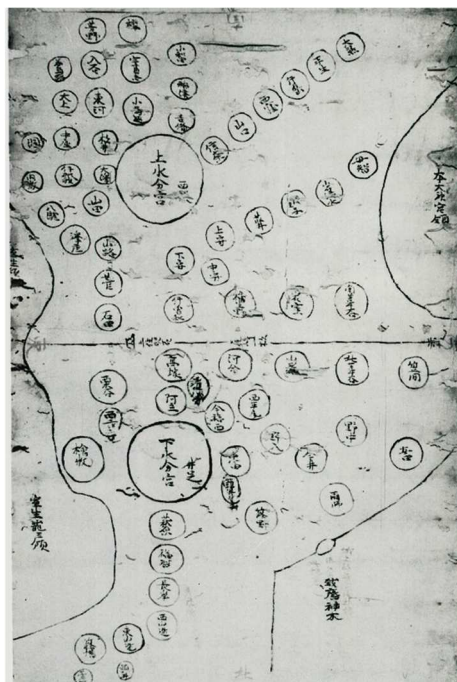
仏教の伝来は国内の各地域（飛鳥・斑鳩・葛城など）に比べるとかなり遅れて8世紀初頭ごろと考えられる。宇陀市内の古代寺院跡で発掘調査の実施事例は2箇所しかなく、そのひとつが県指定文化財（史跡）駒^{こまがえり}帰^く廃^{はい}寺（伝安楽寺）附瓦窯跡（菟田野駒帰）と、小附^{こうつけ}廃^{はい}寺（大宇陀小附^{こうつけ}）である。

宇陀市内に現存する諸寺には、古代に開基したとする寺伝を持つものが多い。榛原^{かいば}戒^{かい}場の戒^{かい}長^{ちやう}寺、榛原^{あかばね}赤^{あか}埴^{ばね}の佛^{ぶつ}隆^{りゆう}寺、大宇陀栗野^{くりの}の大^お蔵^お寺、室生^{おおの}大^お野^の寺、室生の室生寺などである。室生寺のみが奈良時代後半の開基で、他は平安初期と推定されている。他にこの地域の特殊な仏教遺跡として飯降^{いぶり}薬師の磨崖仏がある。全体が火災にあっており剥落が激しいものの、白鳳時代から奈良時代前半の時期のものと推定されている。

【②中世～近世】 荘園の成立と国衆の台頭



本文で登場する物件等の位置図



『水分神領古図』（『菟田野町史』より）

芳野川北岸にある古市場集落のほぼ中央の杜に、宇太水分神社が鎮座する。ここは中世の西殿荘で、神社のある場所を西殿または玉岡と呼び、のちに付近を古市場と呼んだ。社伝によると崇神天皇の時代の創建とあるが定かでない。

鎌倉末期の社殿が現在も残り、少なくとも大永3年（1527）には行われていた例祭が現在まで連綿と続いている歴史のある神社である。これについての詳細

は第2章 P100 で紹介する。

前頁の図は、宇太水分神社が所蔵している『水分神領古図』である。正応5年(1292)に描かれたと推察され、当時の状況を示す史料として参考になる。

これら中世後期荘園は、それ自体村落と重なっており、古図の荘園名の多くが現大字名と同一、あるいは類似していることから現大字の原型とみられる。

鎌倉幕府による諸国守護の設置においても大和国はその対象外とされ、平安時代よりこの地を支配していた興福寺が実質その役割を担うことになる。宇陀にも興福寺領の荘園が存在していたが、こうした荘園の現地管理を担う荘官として成長を遂げ、のちに伊勢国司北畠氏から「和州宇陀三人衆」と呼ばれたのが秋山・沢・芳野の各氏である。

南北朝時代以降、大和国から伊勢へと通じる街道は伊勢本街道と呼ばれ、都と伊勢を結ぶ幹線ルートとなった。街道は長谷寺から宇陀を抜け、伊勢国一志郡多気に入る。京・奈良の有力者から国衆に至るまで、この街道の掌握を巡って対立と抗争を繰り返した。

伊勢方面は南朝・後南朝の中心として南伊勢に勢力を張り続けた伊勢国司北畠氏が宇陀方面にも勢力を拡大した。『太平記』「神南合戦」の条には「和田・楠・真木(牧)・佐和(沢)・秋山」とあり、秋山・沢両氏が南朝方として活躍していたと伝えている。

また、南北朝統一後の応永13年(1406)正月2日付の興福寺大乘院『宇陀郡奉行引付』によれば、秋山・沢氏による荘園の押領(武力をもって他人の所領や年貢などの知行を奪うこと)で宇陀郡の大乘院の支配が実質的に機能しなくなっていたことが記されている。

『澤氏古文書』の応永22年(1415)3月28日付の北畠満雅書状に、沢伊予守が伊勢国飯高郡神戸六郷の内司職及び検断職⁷をあてがわれたことが記されており、北畠氏と沢氏が主従関係にあったことがわかる。

秋山・芳野氏もこのころには沢氏と同様に北畠氏との主従関係に入ったと考えられ、この関係は戦国末期の北畠氏の滅亡まで続く。

その後、応仁の乱から戦国期にかけて秋山・沢氏ら宇陀の国衆は權益確保・勢力拡大のため私闘を繰り返す。こうした郡内での紛争を抑止し、互いの武力衝突を避けるために秋山・沢・芳野は宇陀郡内一揆の盟約を結び、地域連合体を組織して地域の安定を図ろうとした。

山辺(現在の宇陀市北部)では、国衆等が互いに団結を深め、いくつかの党＝同盟を結成するようになる。無山・多田・上笠間・下笠間・白石・山邊等の国衆

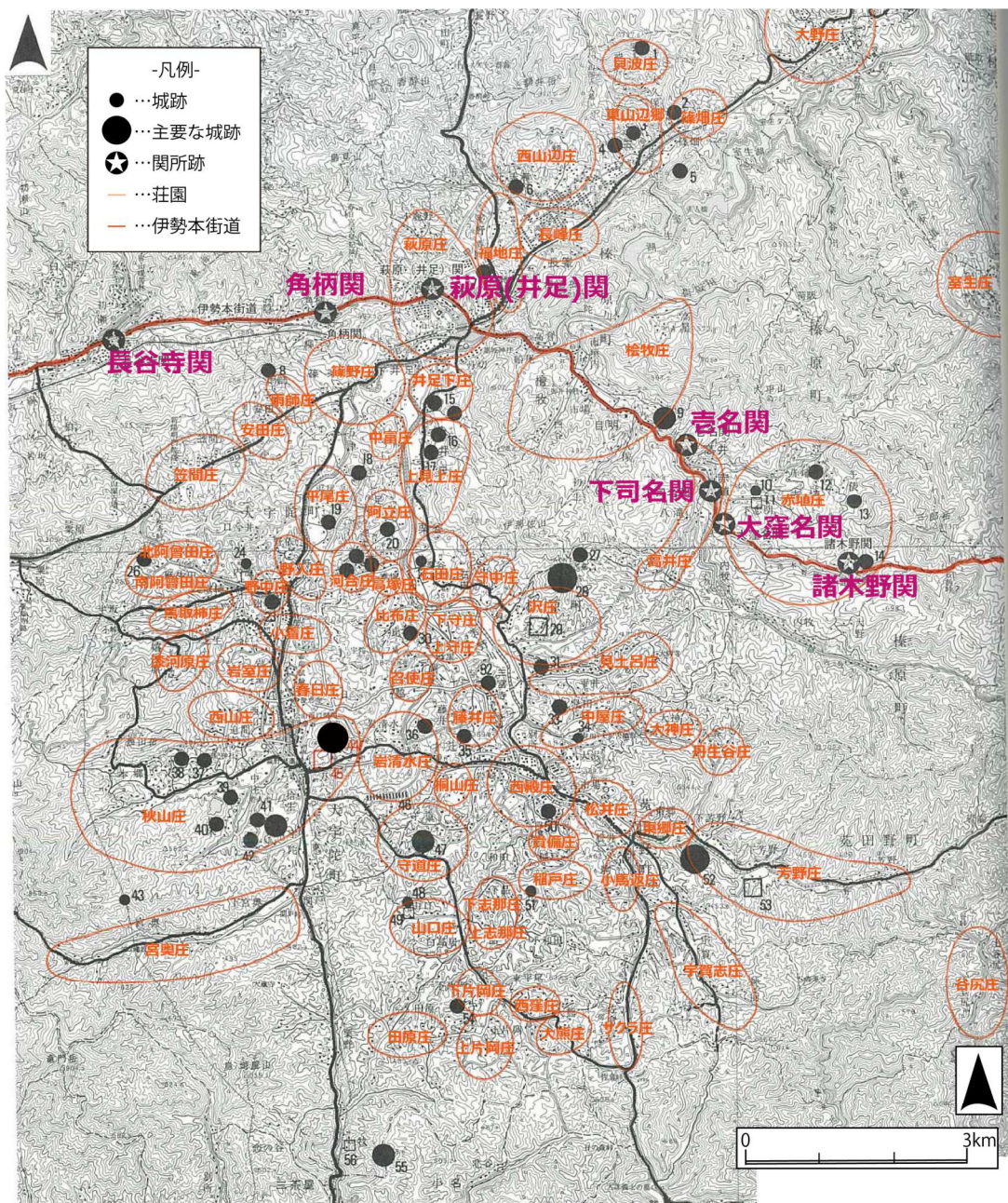
⁷ 荘園内の管理や治安維持の役。

がいたが、その多くは山内党として、南北朝以来同盟を結んでいた。

その精神的紐帯となっていたのが染田天神講⁸で、拠点の染田寺を所領していた多田氏は山内党の中でも指導的な地位にいたと考えられている。

口宇陀地域各所には、こうした南北朝から戦国の争乱期にかけて築かれたと考えられる城郭跡や居館跡が数多く存在する。

現在、口宇陀地域内では約 80 箇所が確認されている。分布の粗密はあるが、



口宇陀地域の荘園分布と城館位置図

ねんよしゅう

⁸ 年預衆のなかから交代に毎年年預（頭役）として天神講＝連歌会の運営を行う。講への参加は、年預衆およびその子孫、山内に居住し連歌の心得がある者に限られる。

ほぼ数庄にひとつの割合で存在が確認できる。

秋山・沢・芳野氏らの国衆のもとには、檜牧^{ひのまき}、井足^{い だに}、大貝^{おおがい}、山邊^{あかばね}、赤埴^{も ち}、守道^{も ち}、戒場^{かい ば}、高塚^{たかつか}、丹生谷^{に ゆう だに}（現在の入谷^{に ゆう だに}）、諸木野^{もろ き の}などの中小の国衆がその被官衆として取り巻いている。

こうした城館跡もそれら様々な国衆により築かれたものと推察される。永禄2年（1559）の松永久秀の大和攻略により、永禄3年（1560）には、澤・檜牧城も占拠され、澤城には松永配下の高山氏が入城する。幼少の高山右近もここで過ごし、この城内で洗礼を受けたとされる。その後、永禄11年（1568）には沢氏が再び澤城に入る。秋山氏は松永方として、大和国中の十市氏の所領を侵している。松永氏滅亡後は筒井氏の配下に入ったと考えられ、天正4年（1576）に北畠氏が滅亡したあとは、豊臣家配下の蒲生氏郷^{がも う じ さと}の与力衆として秋山・沢・芳野の名前が見られる。

伊勢街道の発達

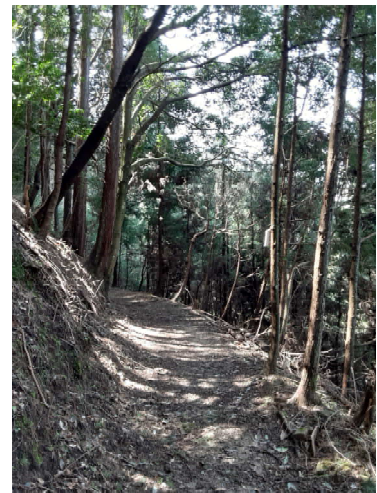
宇陀の地名は、古くは大和から伊勢へ出る道として記紀にみることができる。

例えば『日本書紀』の仁徳天皇四十年条に 隼別^{はやふさわけ}皇子^{め とり}が雌鳥皇女^{う だ}を伴って伊勢へと逃れようとして、菟田^{う だ}に至り、素邇^{そ に}の山を経ている。『古事記』にも「宇陀^{う だ}の蘇邇^{そ に}に到りませる時に」と記す。

「ウダ」と「ソニ」の用字は異なるが、後世、国学者の本居宣長は『古事記伝』のなかで、これらの道が古道であったと考証している。

集落を結ぶこれらの道は、荘園農民たちが荘園領主のもとに年貢を運ぶ道として利用された。

また榛原檜牧から榛原赤埴の佛隆寺を経て室生寺に至る道は修行僧のたどる道でもあった。このころから伊勢参宮が盛んになり、伊勢街道の沿道集落に宿の発達を促した。詳しくは第2章 P82 にて紹介する。



伊勢本街道（高井）

秋山城から宇陀松山城へ

宇陀三人衆のひとり、秋山氏は現在の阿紀神社周辺を領地とする秋山庄の荘官から国衆へと成長した。

現在の場所に居館と城を築いたのは、定かではないが、南北朝から戦国時代にかけて築かれたと考えられている。

以後、加藤光泰、羽田正親、多賀秀種ら秀吉・秀長配下の家臣が歴任し、関ヶ原の戦いののち、福島高晴が封じられる。これらの家臣たちにより、秋山城は大規模な改修が加えられ、城下町の整備も進んだ。このころ、町名が阿貴町から松山町に改称された。

この城割役を担ったのが小堀遠江守正一（遠州）と中坊左近秀政である。福島氏の改易後、宇陀郡は織田信雄が領した。藩政の中心は長山丘陵付近（現在の大字宇陀地域事務所周辺）に構えられた。



『阿紀山城図』（一部）

宇陀松山藩の成立と改易

初代藩主織田信雄は、本能寺の変で父信長と兄信忠を亡くしたが、戦乱の世を生き抜いた。徳川家康以来、徳川家との親交を続けながら江戸時代の織田家の礎を築いた。大徳寺総見院（京都市北区）、室生寺（宇陀市室生）、徳源寺（宇陀市大宇陀岩室）などに墓（五輪塔）が残されている。



現在の地図に重ねた宇陀松山藩の範囲

第2代藩主高長は、信雄の後継を巡って上野小幡藩（群馬県甘楽郡）との間で起こった宗家争いを制して織田宗家は宇陀松山藩であることを内外に示した。

第3代藩主長頼は、能の名手として知られ、江戸城で将軍に御所望されて演能したとの記録が残る。『御用部屋日記』によると、神戸社

（現在の阿紀神社）などで「神事能」や「祝儀能」を催し、家臣から庶民に至るまで能を見物させていた。藩財政が悪化した時期でもあり、杉や檜の植林や、竹刈り、柴刈りを藩で行ったほか、漆や柿、山椒、茶や楮など商品作物の栽培を奨励した。

第4代藩主信武は狩りを好み、武家・農民・町人とで泊りがけで狩りを行った記録がある。しかし元禄7年（1694）、信武は年寄田中五郎兵衛を「手打ち」に、家老生駒三左衛門を「上意討ち」にし、自害するお家騒動「宇陀崩れ」を起こしたため、翌年、織田家は柏原藩^{かいりばら}へ移封された。織田家が柏原へ移ったあとの宇陀郡は幕府の直轄領となった。

薬のまち、宇陀



森野旧薬園 桃岳庵横の薬草畑



通称「花の木」⁹

薬草の栽培に適した気候風土の宇陀郡では、各地で薬草が盛んに栽培されていたほか、森野藤助（初代）による幕府公認の私設薬園が創設され、松山町には多くの薬種問屋^{やくしゅどんや}が軒を連ねていた。近世中後期には、商品流通にかかわる在方株として、繰綿問屋株、繰綿屋・仲買株、絞油屋株、薬種屋株・合薬屋株、質屋株、三商売（古着、古鉄、古道具）株が設立されている。薬種屋株は天明3年（1783）に奈良奉行所で認可され、同時に合薬屋株の設立も認可された。「宇陀郡松山組薬種屋合薬屋」（『藤井・笹岡家文書』/安政元年（1854））によると、松山町では43軒、周辺の村で10軒の薬屋が記されている。詳しくは第2章 P188 にて紹介する。薬のほか、宇陀紙の卸や葛の製造、奈良晒^{さらし}の生産など、様々な特産品の

⁹ 花ノ木はムクロジ科カエデ属の落葉高木。雌雄異株、カエデの仲間で「ハナカエデ」ともいう。日本の固有種で長野県南部・岐阜県南部・愛知県北東部の3県境、木曽川流域の山間湿地に自生する。4月に葉が展開する前に赤い花を咲かせ、6月に実をつける。秋には葉が紅葉または黄葉する。絶滅危惧Ⅱ類（VU）（環境省レッドリスト）。

生産や販売が行われ、大和の重要な産業として認識されていた。

室生寺の女人高野としての賑わいと巡礼の道

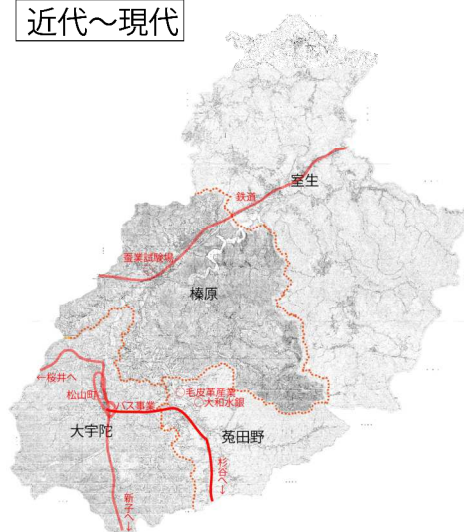
宇陀を代表する寺院に山号を「^{べんいちさん}一山」と号する室生寺がある。女人禁制だった高野山に対し、女性の参詣が許されていたことから「女人高野」の別名があり、現在は石楠花の名所としても知られる。

『^{しよくにほんぎ}続日本紀』や『^{べんいちさんねんぶんどしやそうじょう}一山年分度者奏状』によると、奈良時代末期の宝亀年間（770～781）、当時の東宮・山部親王（のちの桓武天皇）の病氣平癒のため、室生の地において延寿の法を修したところ、龍神の力で見事に回復したので、興福寺の僧、^{けんけい}賢璟が朝廷の命を受けここに寺院をつくったと伝わる。

また、宇陀西国三十三所巡礼¹⁰の第二十二番札所に位置づけられ、様々な巡礼者で門前が賑わいを見せていた。詳しくは第2章 P115 にて紹介する。

【③近代～現代】 幕末の動乱、奈良県の成立

近代～現代



本文中で登場する物件の位置図



天誅組の変(ルート図)

文久3年（1863）8月、宇智郡五條で起こった天誅組の変¹¹から4年余りののち、慶応3年（1867）に大政奉還となる。慶応4年（1868）5月に奈良県が設置されて以降、奈良県→奈良府→奈良県と名称がめまぐるしく変わり、五條県の

¹⁰ 第1番札所光明寺から第33番札所嬉河原観音寺まで全行程104km、松山町を出発して松山町に戻る回遊型コースになっている。

¹¹ 天誅組の変は、文久3年（1863）8月17日に尊王攘夷派浪士の一団（天誅組）が大和の国で決起し、幕府五條代官所を襲撃するが、直後に起こった京都の政変により一転して逆賊として幕府軍に討伐され、東吉野村鷺家で壊滅した事件。宇陀からは林豹吉郎が砲術家として天誅組に参加した。

設立、廃藩置県による柳本県等の設置などを経て統廃合を重ね、明治 4 年(1871) 11 月に大和一国を所管する奈良県が成立する。

明治 9 年(1876)に奈良県が堺県の管轄となったあと明治 14 年(1881)に大阪府と合併する。しかし、大和出身の大阪府会議員を中心とした奈良県再設置運動が実を結び、明治 20 年(1887)に奈良県再設置の勅令が出された。

宇陀郡内の動きとしては、明治 6 年(1873)に警察署松山屯所、明治 19 年(1886)に公会堂、明治 21 年(1888)に奈良治安裁判所松山出張所が設置されたほか、明治 23 年(1890)、郡制法が公布され宇陀郡役所が設立される(明治 27 年(1894)に松山町中新にて新庁舎着工、明治 32 年(1899)に竣工)。

一方で明治 22 年(1889)に町村制の実施に伴い松山町が設置され、明治 36 年(1903)、松山町拾生に松山町役場(現在の宇陀松山会館)が建設され、松山町が宇陀郡の政治の中心地として機能するようになった。さらに地域の要請により、学校が徐々に整備された。

産業の興隆と衰退

宇陀市の産業の中心は農林業であった。養蚕業は、明治の初めには見られなかったが、県当局は明治 20 年(1887)になると織物・茶・繭糸を主要物産として改良奨励に力を入れ始めたとある。しかし宇陀方面で養蚕が注目されるようになるのは明治 34 年(1901)ごろからで、菜園は次第に桑畑に変わり、養蚕組合が組織されるまでになった。

奈良県は大正 6 年(1917)榛原町萩原に、蚕業試験場を開く(建物は平成 19 年(2007)に除却)。昭和初期に蚕種の製造が盛んとなり、内牧村自明に製糸工場が建てられた。大正 6 年(1917)には榛原町に工場を移し、郡是製糸株式会社に発展解消した。

しかし、盛んになってきた養蚕業も、世界恐慌で大打撃を受け、第 1 次世界大戦後発達してきたアメリカの人造絹糸じんぞうけんしに対抗し糸価が低く抑えられる傾向となり養蚕農家の経営が困難になった。養蚕業は、太平洋戦争に突入すると次第に衰えていった。

煙草は江戸時代から栽培されていたが、明治になってもその栽培は続いていた。明治 24 年(1891)ごろ、宇陀郡の葉煙草栽培は県内第一位となった。明治 31 年(1898)の葉煙草の専売制が実施されると、国家の干渉や制約が多くなったため作付は減少し始めた。養蚕業の興隆と相まって、煙草畑は桑畑に変わっていった。しかし、桑畑も戦争の激化とともにイモ畑に変わっていった。

耕作地が少ない奥宇陀では、養蚕のほかに練炭の製造販売や鍋蓋・桶・樽の製

造が盛んで、内職に柳^{やなぎごうり}行李の製造が一時みられた。



旧蚕業試験場の外観



蚕や繭をモチーフにした鬼瓦

毛皮革産業の興隆

菟田野の毛皮生産の起源は明らかでないが、江戸期に農業の副業として始まり、本業として営むようになるのは明治10年代(1877~1886)のことであったという。生産される毛皮の殆どは兎の皮で、一部狐も扱っていた。原皮は欧米から輸入して加工した。

鹿皮鞣^{しかがわなめ}しの起源は、毛皮製鞣^{けがわせいじゅう}の経験を活かし、明治23年(1890)初代藤岡勇吉が伊賀や大阪から職人を集め、小さな工場を営んだことに始まる。武具に使う皮や印伝、戦後からは自動車雑布用セーム皮などを生産。毛皮革産業は現在も続いており、奈良印伝の新たな製品開発や、海外の自動車メーカーと業務提携を結ぶ等、販路の拡大に努めている。

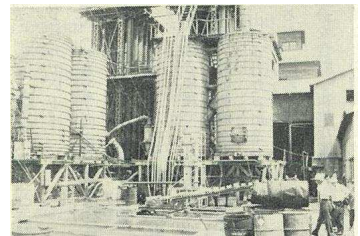
水銀鉦山の近代化とその終焉

菟田野の地に辰砂を産したとの伝えは古く、1200~1300年もの昔にさかのぼる。菟田野地域ではかなり早く開発採鉦されていたことが確実視されており、昭和3年(1928)に菟田野大沢の旧坑内から、仏像や装身具、松根の焚き残りが発見されている。

近代を迎えて、明治中頃~後期にかけて、五代友厚をはじめとした関西の実業家による水銀鉦山の開発が盛んとなり、松井・古市場・大沢を中心に水銀が採掘され、戦後は輸入鉦の精錬も手掛けるようになり、昭和34年度(1959)には出鉦量1万トン余、水銀にして約25トンの生産をしていた。しかし、



大和水銀鉦山 坑口(『菟田野町史』(昭和43年(1968)菟田野町史編集委員会)より)



大和水銀鉦山 精錬所(『菟田野町史』昭和43年(1968)菟田野町史編集委員会)より)

排煙・排水から鉱害が起こり、農作物が被害を受ける等の理由により昭和 46 年（1971）、大和金属鉱業の閉山をもって、水銀生産は終わりを迎えた。

鉄道の敷設による人とモノの流れの変化

明治 23 年（1890）、奈良－王寺間に鉄道が敷設されたのは始まり、明治 24 年（1891）王寺－高田間、明治 26 年（1893）高田－桜井間が開通、明治 29 年（1896）には奈良－京都間が開通した。宇陀郡でも明治 28 年（1895）に「^{せいわ}勢和鉄道」の名義で桜井～松坂間の鉄道敷設の免許を受けていたが、経営が進まず実現をみないまま終わっている。大正時代に鉄道敷設の要望が再燃し、「宇陀鉄道期成同盟会」がつくられ、大正 10 年（1921）に内閣および貴族院・衆議院に鉄道敷設の嘆願書を出したが鉄道は実現しないまま時が経った。

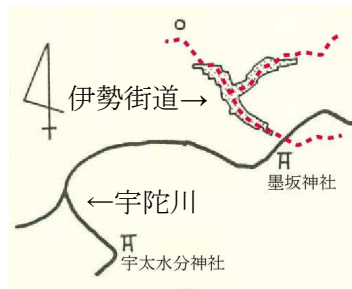
昭和 5 年（1930）参宮急行電鉄（現近畿日本鉄道）が開通したのちも、国鉄桜松線（桜井－榛原－松山）の請願が行われたが、実現しなかった。



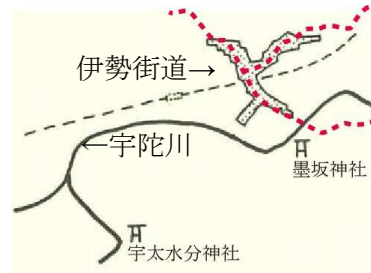
大和宇陀神武天皇御聖蹟御図絵 昭和 13 年（1938）吉田初三郎 作（宇陀市 蔵）

昭和初期の大宇陀地域・菟田野地域・榛原地域・室生地域の様子を、「大正の広重」と呼ばれ当時人気を博していた絵師、吉田初三郎が鳥瞰図に描いている。周辺に残る神武天皇御聖蹟を記し、宇陀松山城跡、森野旧薬園、宇太水分神社などの名所も記載がある。榛原駅前には工場の煙突が並び、町と町の間を車が走る様子が描かれている。これまでは徒歩が主な移動手段で、細かい間隔で宿場町や在郷町などが点在していたが、電車や自動車などの長距離移動が可能な移動手段の普及に伴い、人の流れが大きく変わっていった。

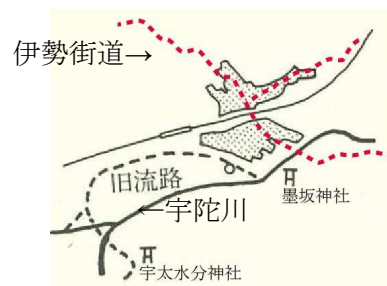
次頁の図は、榛原萩原の町場の変遷図である。伊勢本街道とあを越え道の分岐点（札の辻）があり、江戸時代は宿場町として栄えていた萩原だが、昭和 5 年（1930）の榛原駅の完成を境に駅周辺の市街化が急速に進んでいる。



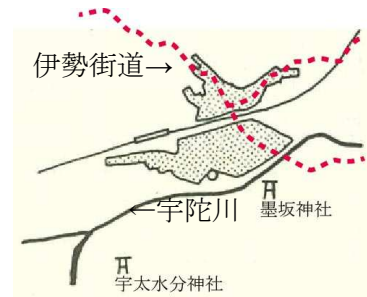
明治 41 年 (1908)



大正 11 年 (1922)



昭和 42 年 (1967)



昭和 58 年 (1983)

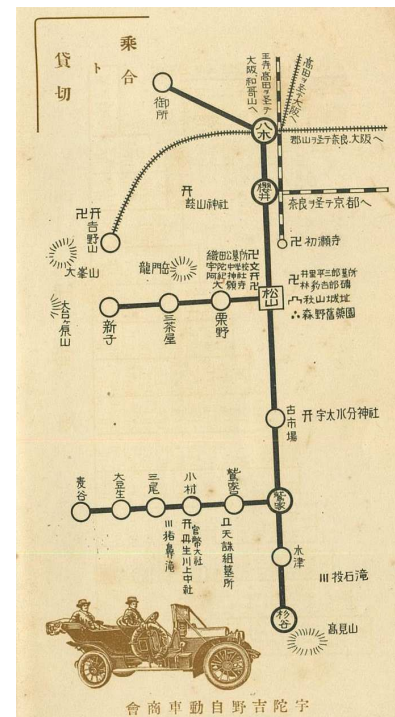
萩原の町の変遷図(榛原町史より) ※伊勢街道の点線及び文字は今回補足したもの

奈良県で最初の実運行

大正 6 年 (1917) 松山・桜井間を結ぶ乗り合いバスの運行が始まる。元衆議院議員、久保伊一郎らが中心となり、松山自動車商会 (のちの奈良交通) を興したのが、県内初めてのバス事業という。

自動車は 1916 年型 T 型フォードで松山～桜井間を 50 銭 (雨天時は 2 割増し) の運賃で営業していた。ただ、バス時刻表も停留所もなく、6 人乗りが満員になったら発車し、多いときで 1 日 3～4 回往復するというものであった。道路状況はまだ不十分で、舗装されていない道が多かったので、車がスタックすると乗客も手伝って車体を押し進めていた。

宇陀郡内ではほかに、植田自動車・辻自動車の経営がみられたが、統廃合を繰り返し、昭和 18 年 (1943) から奈良交通となった。左の図は昭和 3 年 (1928) 『松山町外観』に掲載された広告で、東吉野～古市場～松山～桜井～八木～御所までつないでおり、各停留所付近の名所が記され鉄道との接続がわかりやすく書かれている。



松山町概観に掲載された広告

宇陀市の誕生

平成 18 年（2006）に、旧大宇陀町・旧菟田野町・旧榛原町・旧室生村の 4 町村が合併して宇陀市が誕生した。同じ年の 7 月、宇陀松山城跡が史跡に指定され、松山地区が重伝建に選定され、官民で城と町の魅力を活かしたまちづくりを進めてきた。

令和 2 年（2020 年）には「女性とともに今に息づく女人高野～時を越え、時に合わせて見守り続ける癒しの聖地～」のストーリーが日本遺産に認定された。室生寺・佛隆寺・大野寺・安産寺がストーリーを構成する文化財として位置づけられ、観光振興に貢献している。

一方で少子高齢化による地域の疲弊等、共通の課題認識もあるなかで、かつて宇陀で生産が盛んだった大和当帰に着目し、大和当帰の生産奨励と当帰の葉の活用に関心をもち始めるようになる。龍王ヶ淵など魅力ある自然環境やスポーツツーリズムを呼び水に観光情報を発信するなど、この状況を打開すべく地域の特色を前面に押し出したまちづくりに取り組むようになった。

「みんなが生きがいをもって暮らせる魅力ある健幸なまち宇陀市～輝く歴史と文化の息づくまち～」を将来像に据え、この実現に向けて様々な施策を模索している。



榛原駅前でのマルシェの様子



重伝建選定記念講演会の様子



宇陀松山華小路

(2) 関わりのある人物

【原始～古代】

柿 本人麻呂 かきのもとのみと まろ 齊明天皇 6 年（660）生、神亀元年（724）没。宮廷歌人として活躍した。かるのみこ 軽皇子の くすりがり 葉狹に随行して宇陀を訪れており「東の 野にかぎろひのたつみへて かえりみすれば 月傾きぬ」等、数々の万葉秀歌を残した。



柿本人麻呂

山部赤人 やまべのあかひと 生年不詳、天平 8 年（736）没。聖武天皇時代の宮廷歌人と推測される。自然の美しさや清 さやけ さを詠んだ叙情歌で知られ、柿本人麻呂とともに歌聖と呼ばれ讃えられた。赤人墓と伝わる五輪塔が額井岳の麓にある。



山部赤人

中 将 姫 ちゅうじょうひめ 天平 19 年（747）生、宝亀 6 年（775）没。菟田野宇賀志の日張山青蓮寺が舞台となる中将姫物語の登場人物。中将姫は藤原の鎌足のひ孫である右大臣 とよなり 豊成と紫の さき 前の間に生まれ、5 歳で母を亡くす。中将姫の器量に嫉妬した継母が家臣に中将姫の殺害を命じるが、この家臣は青蓮寺に姫を匿い、数年後に狩に訪れた豊成と中将姫は再会するという物語である。この中将姫物語は能 ひばり 「雲雀山」をはじめ、浄瑠璃や歌舞伎などで演じられ、後世に人気を博した。



青蓮寺本堂

賢 憬 けんけい 延暦 12 年（793）没。尾張の人。東大寺に入り鑑真律師に従い具足律儀・菩薩戒を受け長谷寺の別当となった。神道も尊崇し、神仏の調和につとめた。宝亀末年から延暦の初めにかけて、国家鎮護の室生寺創設に携わった。室生寺は龍穴神社の神護寺でもあった。



室生寺奥の院

【中世～近世】

常盤御前 ときわ ごぜん 保延 4 年（1138）生、没年不詳。源義朝の側室。平治物語によると、平治の乱ののち、都から義経を含む 3 人の子供を連れて宇陀の山中へ身を潜めたとある。菟田野松井の常盤御前腰掛石や、大宇陀牧に息子である源義経の伝説が残る。



常盤御前

た だ よりざね

多田順実 応永 15 年（1408）没、多田の人。国衆の家に生まれ、南都の衆徒となり無山・向湊も領した。菅公（菅原道真）を信仰し、貞治のはじめに菅公の肖像画を得て染田天神堂を造立、十三条の規約をつくり年預十人毎年四季に千句の連歌を奉る。近隣の有力寺院・国衆もこれに加わり、貞治 2 年（1363）～永禄 7 年（1564）まで続けられた。



染田天神連歌堂

たかやま う こん

高山右近 天文 21 年（1552）生、慶長 20 年（1615）没。摂津の国衆、永禄 6 年（1563）澤城にて受洗、秀吉配下の大名として高槻城を守るが、天正 13 年（1585）、信仰を貫くため領地と財産を捨てる。慶長 19 年（1614）キリシタン国外追放令によりマニラへと移り、彼の地で没した。



澤城跡

平成 28 年（2016）列福（カトリック教会により、死後、その徳と聖性を認められ、「福者」となること）した。

お だ のぶかつ

織田信雄 永禄元年（1558）生、寛永 7 年（1630）没。織田信長の次男、宇陀松山藩初代藩主。本能寺の変で父信長を亡くし、混乱を極めた戦国の世をしたたかに生きぬき、元和元年（1615）宇陀松山藩の初代藩主となる。没後、第 2 代藩主織田高長（信雄の 5 男）は室生寺五重塔の東に徳源院御廟を造営するとともに、織田家の菩提寺として大宇陀岩室に徳源寺を建立した。



織田信雄

お だ ながより

織田長頼 元和 6 年（1620）生、元禄 2 年（1689）没。宇陀松山藩第 2 代藩主、織田高長の次男。高長の隠居に伴い第 3 代藩主となり、宇陀松山藩 3 万 1,200 石のうち 2 万 8,200 石を相続する。このとき、織田長政（高長の 3 男）は宇陀福地旗本織田家 3,000 石の初代当主となる。長頼は、江戸参勤のため宇陀を留守にするにあたり家臣に「物毎下より申出候様ニ仕置いたし候事第一ニて候事」と、物事は現場の家臣や農民・町人などが意見を言いやすいような環境づくりが第一であると訓示している。また、長頼は将軍や幕閣も認める「能の名手」であった。（詳しくはコラム 5 阿紀神社の神事能を参照）



徳源寺

しもこう べ ちようりゅう

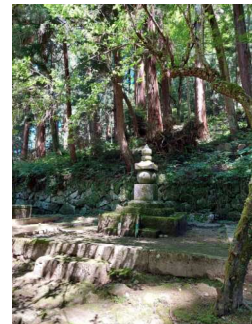
下河邊長流 元和9年(1623)生、貞享3年(1686)没。松山町に生まれ、万葉集研究の大家として名をはせた。若くして京都や大坂に遊学し、漢学のかたわら国学をおさめ、士官の道を断念し、大坂で読書三昧にふけり、のちに古楽を研究、和歌をよくした。水戸光圀は長流の名声を聞いて招聘したが固辞されたため安藤為草を遣わし、万葉集の注釈書の執筆を請け負わせた。『万葉集名寄』『枕詞燭明抄』等、著作多数。



下川辺長流
(長流全集より)

としぎみ

智君 生年不詳、元禄3年(1690)没。第4代藩主、織田信武の正室。御三家尾張藩主徳川光友の養女。実父は後陽成天皇の弟八条宮智仁親王の子広幡忠幸、実母は光友の妹京姫であった。信武との間に信休のぶやす(のちの丹後柏原藩主)と代々姫をもうける。元禄3年(1690)、若くして死去した。室生寺徳源院御廟内に墓(五輪塔)がある。



智君墓(室生寺)

ひらい しょうあん

平井要安 享保元年(1716)没、享年63歳。宇陀松山藩医、杉森市左衛門の息子。藩医平井自安の養子となり、貞享元年(1684)に父の跡目を継ぎ宇陀松山藩医となる。元禄8年(1695)の柏原移封に伴い柏原へ移ったが移封後の家臣人数削減により織田家を去った。医学知識の啓蒙普及に尽くし、多くの医書を出した。浄瑠璃作家の近松門左衛門は、実兄。のちに、岡本一抱子と名乗るようになった。



岡本一抱子(平井要安)

はやしひょうきちろう

林豹吉郎 文政3年(1820)生、文久3年(1864)没。大宇陀拾生の人。鋳物師の長男として生まれ、長崎で遊学中に砲術と出会い、これを極めるため緒方洪庵の適塾で蘭学を学ぶ。京都で出会った同志と天誅組を結成、五條代官所を襲撃。戦況悪化で退却を余儀なくされ、鷲家口にて戦死。



林豹吉郎

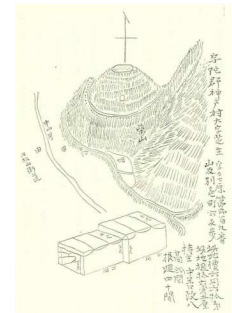
く ぼりょうへい

久保良平 文政9年(1826)生、大宇陀拾生の人。幼少期に薬学を修め、儒学を谷三山に学び、蘭学を緒方洪庵に学び、奈良県で最初の種痘を松山で行った。

【近代】

すすき すけぞう

薄木祐蔵 弘化元年（1844）生、大正 8 年（1919）没。
菟田野稲戸の人、14 歳で薄木家を相続。明治期は郡役所に勤務し、測量から国宝調査の随行まで幅広く仕事をこなし、古墳や文化財の調査等で数多くの野帳を残した。



薄木祐蔵氏の野帳

おかくらてんしん

岡倉天心 文久 2 年（1863）生、大正 2 年（1913）没。
福井藩士の子として横浜に生まれる。語学力を見込まれフェノロサの助手となり、美術品収集や文化財調査を手伝った。東京美術学校の創始者で多くの弟子を育てた。



岡倉天心

まるやまかんちょう

丸山貫長（室生寺住職、仏教復興運動をした）と交流があり、貫長が暮らしていた大蔵寺におおくら じ弁事堂べん じ どうを寄進した。

ふじさわともきち

藤澤友吉 慶応 2 年（1866）生、昭和 7 年（1932）没。
母が大字陀上の人。藤澤家の養子に入り、藤澤樟脳を発売。薬種商をはじめ様々な薬を開発、藤澤薬品（現アステラス製薬）の礎を築いた。



藤澤樟脳の看板

ふじおかゆうきち

藤岡勇吉 安政元年（1854）生、昭和 27 年（1952）没。
菟田野岩崎の人、明治 3 年（1870）に 16 歳で家業のいかだふじ筏 藤問屋を継ぐと共に、取引先の狩猟家より原皮を買い集め、大阪の商人と取引を始めた。明治 23 年（1890）伊賀・伊勢・京都方面から毛皮鞣職人を集めて小工場を営み、大正期には原皮は東南アジアより仕入れ、和弓の武具用として全国の武具店へ、印伝は甲府・東京へ出荷するなど、毛皮革製造加工業の礎を築いた。



現在の藤岡勇吉商店

やま だ やすたみ

山田安民 明治元年（1868）生、昭和 18 年（1943）没。
榛原池上の人、明治 32 年（1899）大阪で信天堂山田安民薬房を創設し奈良県において殖産興業に従事。売薬の輸入輸出増進に意を注ぎ、明治 38 年（1905）に株式会社東亜公司を組織し本邦最初の売薬輸出を開始。明治 42 年（1909）、ロート目薬製造販売（現在のロート製薬）を始めた。



山田安民の生家

^{つむらじゅうしゃ}
津村 重舎 明治4年(1871)生、昭和16年(1941)没。
榛原池上の人、山田安民の弟。名古屋の津村家を継いだ。
21歳で上京し中将姫に所縁をもつ中将湯を発売し、製薬
界に重きをなした。津村順天堂(現在のツムラ)、東亜公
司、第一製薬(現在の第一三共)等の各社長となり、東京
市議員に3回、貴族院議員として2回選ばれ政界でも活
躍した。



中将湯の看板

＝宇陀市出身の製薬会社の創業者＝

先述のほかにも、創業から今日に至るまで女性保健薬として製造され、現在
も「命の母」シリーズが販売されている笹岡薬品(株)の創業者^{ささおかしょうぞう}**笹岡 省三**や、
下痢止め・整腸薬の「アイフ」を販売するアイフ製薬(株)の創業者^{たにぐちさくじ}**谷口 作治**
^{ろう}**郎**、業界に先駆けて漢方エキス剤の製造販売を開始した「小太郎漢方製薬
(株)」の創業者^{うえだ たろう}**上田 太郎**など、創業者が宇陀市出身という製薬会社がいくつも
ある。

宇陀市が薬草栽培に適した環境であることから生産者が多く、薬種問屋や薬
屋が身近にあり、一般的な処方その他、家に伝わる処方があるなど薬草を活かせ
る環境が整っていたことがその背景にあるとみられる。

4. 文化財等の分布状況

種別	国指定・選定	県指定	市指定	国登録	計
有形文化財					
建造物	16	9	3	9	37
絵画	2	1	2	0	5
彫刻	18	10	1	0	29
工芸品	5	2	0	0	7
書跡・典籍	0	0	1	0	1
古文書	0	1	0	0	1
考古資料	0	0	1	0	1
歴史資料	1	0	4	0	5
民俗文化財					
有形の民俗文化財	0	1	0	0	1
無形の民俗文化財	0	4	2	0	6
記念物					
遺跡	6	4	2	0	12
動物・植物・地質鉱物	4	8	0	0	12
伝統的建造物群	1	0	0	-	1
計	53	40	16	9	118

選定保存技術保持者(茅葺／1名)

宇陀市内の指定等文化財数

宇陀市には、令和7年1月1日現在、118件（国指定等62件、県指定40件、市指定16件）の文化財が指定・選定・登録されている。これらの文化財は、建造物は室生寺と大宇陀地域に多い傾向にあり、美術工芸品は室生寺に集中している。また、選定保存技術「茅葺」の保持者として、隅田隆蔵氏が認定されている。



宇陀市内の指定文化財 分布図

(1) 国指定等文化財（一部）

【宇太水分神社本殿^{うだみくまりじんじゃほんでん}】（国宝）

宇太水分神社は、芳野川と四郷川の合流点から 500 m 南東の小高い山の麓に鎮座する神社である。速秋津比古神、天水分神、国水分神をまつり、水分三座と称される。社伝によると垂仁天皇の時代に始まるという。

本殿は、木造一間社隅木入春日造、檜皮葺で、3 棟の社殿が連なり屋根が一体化している。外部は彩色が施され、細部彫刻の造形が見事である。

棟木銘より元応 2 年（1320）創建とされる。毎年、境内を中心に行われる秋の例大祭では、惣社水分神社の神輿と、菟田野地域の 6 つの太鼓台が集まり、豪壮な引き回しが披露される。



宇太水分神社本殿

【室生寺本堂^{かんじょうどう}（灌頂堂）】（国宝）

室生地域は、火山活動により形成された地形特有の風貌を持つ場所が多く、古代より信仰の対象となっていた。中でも吉祥龍穴は靈驗あらたかな場所として重要視され、祈雨や病氣平癒などの祈りが捧げられてきた。室生寺本堂は、吉祥龍穴から西へ 500m の位置にあり、木造桁行 5 間、梁間 5 間、入母屋造檜皮葺の仏堂である。

『建内記』所載の後伏見上皇諷誦文^{ふうじゅもん}¹²によると延慶元年（1308）に供養されている。堂内には如意輪観音坐像（重要文化財）が本尊として仏壇の厨子に安置され、正御影供養、陀羅尼会など室生寺における重要な行事はここを主会場に執り行われている。

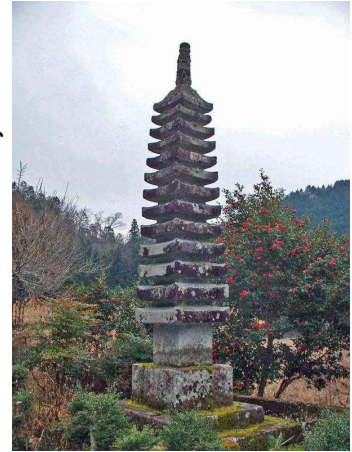


室生寺本堂（正御影供^{しょうみえいぐ}）

¹² 死者の冥福を祈るため、三宝（仏・法・僧）への布施物や布施の趣旨を記した文

【十三重塔】（重要文化財（建造物））

塔高 4.15m の石塔で、この時代のものとしては極めて均整のとれたものである。建立時期は不明であるが、その様式から室町時代初期と考えられている。台石下面の穴からは、寛保 2 年（1742）銘の板札、薬師如来像、阿弥陀如来像、銅製納骨筒が発見されている。

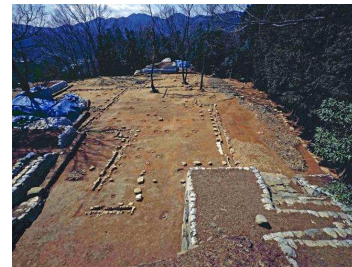


石造十三重塔

【宇陀松山城跡】（史跡）

奈良盆地南東の山間部にある中世から近世にかけての城跡。城跡は標高約 470m の古城山^{しろやま}にあり、中央に天守・本丸が東西に並び、その周囲を帯郭^{しろわ}が囲む。

宇陀松山城跡は近世初期城郭の特徴をそなえているが、元和元年（1615）に小堀遠州により天守・本丸・帯郭の全域が破脚されており、門・櫓^{やぐら}・御殿の解体・撤去、石垣・石段・礎石の破壊のようすが明瞭に観察される。これに關係する書状が残されており、城割りの具体的状況が把握できる希有な事例である。また、それに先立つ秋山氏の段階の遺構も周辺で確認されており、中世から近世にかけての宇陀地方の中核的な城郭と城下のあり方を知る上で欠くことのできない重要な遺跡である。



宇陀松山城跡

【宇陀市松山伝統的建造物群保存地区】（重伝建）

史跡宇陀松山城跡の西の山麓から宇陀川にかけて、南北に細長く展開する旧城下町、宇陀松山。近世初頭に秋山氏が開き、のちに豊臣氏の家臣の手により拡大整備され、現在に至る。

背割り水路や一定の幅の町割りなど、城下町特有の特色を持ち、木造つし二階建、棧瓦葺、切妻造の町家が連なる。江戸～昭和初期にかけての家が半数近く残っており、年代により格子や虫籠窓の形が異なる。

また、宇陀川から引いた水路が町並みを南から北へと流れ、生活・農業・防火の用途に使われる。



宇陀市松山伝統的建造物群

【旧伊那佐郵便局】（登録有形文化財（建造物））

旧伊那佐郵便局は、榛原比布の芳野川沿いに建つ木造二階建、寄棟造、棧瓦葺で鉄板葺の庇が廻る建物である。下見板張りにペンキ塗で、東正面南寄りに設けた庇には組子で縁取りした欄間に郵便マークを飾る。

棟札に昭和9年（1934）建立とあり、昭和初期の農村部における郵便事業の様相を伝える。



旧伊那佐郵便局外観

（２）県指定文化財（一部）

【木造薬師如来坐像】（有形文化財（彫刻））

榛原萩原に所在し、現在は西峠区が管理している木造薬師如来坐像は、左掌に薬壺^{やっこ}を載せ、右手臂^{ひじ}を前方に屈して施無畏印^{せむいん}を表し、結跏趺坐^{けっかふざ}する薬師如来像である。高さ83.7cm 檜材の一木から彫り、内刳^{うちぐり}を施す。螺髪^{らほつ}は細かく整え、頭部をやや小ぶりにつくって全体のバランスもよく、雅やかな顔つきと彫り口の浅い衣文^{えもん}の意匠も巧みで、平安末如来像の典型的な事例である。

当初の光背を失うが、造立当初の荘厳のさまを伝える貴重なものである。

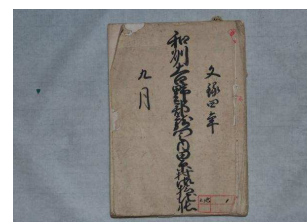


木造薬師如来坐像

【片岡家文書】（古文書）

大字陀田原に所在する片岡家は、歴代当主が近世のほぼ全期間を通じ田原村の庄屋をつとめ、郡山藩領時代には大庄屋、幕府領時代は年預^{ねんよ}（惣代庄屋）、明治以降は戸長^{こちょう}や村長などもつとめている。

片岡家には、田原村や田原組村々に関する村方文書が豊富に残っており、その数は近世文書を中心に1万3千点を超える。質・量ともに優れた県内屈指の村方文書として高い価値を有するものである。



片岡家文書

【駒帰廃寺（伝安楽寺） 附 瓦窯跡】（史跡）

駒帰廃寺は、菟田野駒帰に所在する。駒帰廃寺に関する資料は多武峯談山神社社家葛城家に伝わっていた



駒帰廃寺

『^{う だ く じ き}宇陀旧事記』の写本にみえるのが唯一のものである。以前から^{そ せ き}礎石や^{ぶ どう から く さ も ん}葡萄唐草文のほか、瓦片の出土などがあった。発掘調査で西方建物遺構と東方建物遺構及び^{かわらがま}瓦窯跡を検出し西方建物は焼土などから焼失したことがわかる。東方建物は西方建物に接して建てられている。瓦窯は建物遺構から約 70m 東方の南傾斜面に築造されている。

【^{おく しば}奥ノ芝1号墳・2号墳】(史跡)

榛原ひのき坂に所在する奥ノ芝古墳群は、4基の古墳で構成され、このうち、昭和46年(1971年)の発掘調査によって確認された古墳が県史跡に指定されている。1号墳・2号墳の埋葬施設は、地元で産出する石材(通称榛原石)を板状に割り、レンガ状に積み上げた横穴式石室(^{せんづみ}磚積石室)である。2号墳の石室内には、箱形石棺が安置されている。1・2号墳は、飛鳥時代(7世紀前葉～中葉)の役人の墳墓と考えられており、2基が1セットとなっている。磚積石室は桜井市から宇陀市榛原地域を中心として築かれた数少ない横穴式石室である。

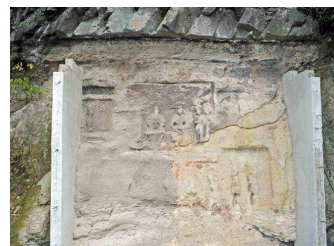


奥ノ芝2号墳

【^{い ぶり や く し ま が い ぶ つ}飯降薬師の磨崖仏】(史跡)

飯降薬師の磨崖仏は、室生向湊に所在する。標高約465mの山中に、岩面の中央部を、幅約3.7m、高さ約4.5mにわたって平滑にし、複数の仏像を高肉彫りしたものである。損傷が甚だしく図様は不明瞭だが、中央区・西区・東区・下区の四部分から構成されている。

全国的に見ても奈良時代以前に位置づけられる石仏は少なく、その中でこれほど多様な群像を彫り出し、製作優秀なものは希有であり、日本における磨崖仏の展開を知る上で重要な位置を占め、貴重な事例である。



飯降薬師の磨崖仏

【^{ぶ っ り ゆ う じ}佛隆寺のサクラの^{きょじゆ}巨樹】(天然記念物)

榛原赤埴に所在する佛隆寺の桜の巨樹は、ヤマザクラとエドヒガンの雑種であるモチズキザクラの一種で



佛隆寺のサクラの巨樹

ある。ヤマザクラの特徴もあり、学術上、貴重な巨樹である。奈良県下最大・最古ともいわれ、根囲は 7.7m である。近年は、「千年桜」とも呼称されている。

【^{かいちょう じ}戒長寺のお葉つきイチョウ^は】（天然記念物）

榛原戒場に所在する戒長寺のお葉つきイチョウは、裸子植物のイチョウ科に属する植物である。イチョウがシダ類のように孢子を作る孢子植物と種子を作る種子植物との中間性をおびていることは、植物進化系統学上きわめて有名である。お葉つきイチョウがその種子を葉につける現象は、植物の系統的進化発生を示すもので、学術研究資料として、きわめて貴重な存在として知られている。戒長寺のお葉つきイチョウは、目通り 4m、高さ 30m である。



戒長寺のお葉つきイチョウ

（３）市指定文化財（一部）

【^{あなやく し せきぶつ}穴薬師石仏^{りゅうもんがんしつようけつぎょうかいがん}】（彫刻）

室生向刈集落の西端に東面して位置する。前面には覆堂があり、中世の五輪塔などが安置されている。穴薬師石仏は、高さ 179cm、幅 179cm の方形石の四隅を切り落とした八角形の石材（流紋岩質熔結凝灰岩）に三体の地藏菩薩立像を彫っている。中央に、高さ 17cm の蓮華座をもうけ、高さ 150cm の二重円光背を彫りくぼめ、^{しゃくじょう}錫杖・^{ほうじゅ}宝珠を持つ像高 130cm の地藏立像、両側には、同じように蓮華座をもうけ、二重円式光背を彫りくぼめ、中尊よりやや小さい像高 93cm の地藏菩薩立像を厚肉彫りする。また、石仏の前面を柱状の石材で囲み、石室状に造る。

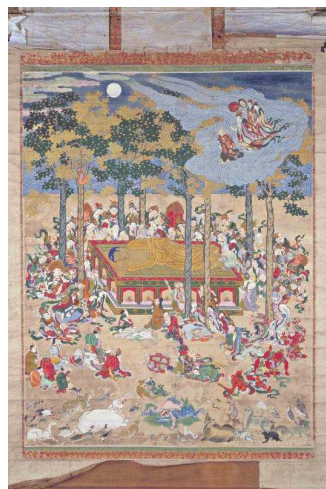


穴薬師石仏

【^{し ほんちやくしよくぶつ ね はん ず}紙本 著 色 仏涅槃図^{りゅうもんがんしつようけつぎょうかいがん}】（絵画）

榛原栗谷に所在する縦長の画面に釈迦入滅の情景を描いた作品である。

釈迦が右手枕すること、菩薩の悲嘆の表情を強調すること、鳥獣を数多く描くことなど、仏涅槃図の一般的な表現に従う。



紙本著色仏涅槃図

本図は、後掲の墨書銘から、本圀寺^{ほんこくじ}26代貫主の日達によって開眼供養されたことがわかる。日達は、延享4年（1747）に没しているので、この製作年代の下限が判り、本図を江戸時代中期、18世紀前半の作と見ることは画風からも矛盾しない。

（４）主な未指定文化財

【澤城跡^{さわじょうあと}】

榛原沢に所在する澤城は、標高約538mの山頂に造られた中世山城で、沢氏が本城とした。山頂には平坦面・土塁・堀切等の遺構が良好な状態で残る。城は、本丸に相当する主郭群、出丸に相当する副郭群で構成され、南斜面には小規模な郭と考えられる平坦面も認められる。麓には沢氏の居館跡が残る。



澤城跡遠景

永禄3年（1560）には、高山友照（図書^{ずしよ}）が城主となり、幼少の高山右近もここで過ごした。高山右近らは、城内の教会で洗礼を受ける。

このころの城内の様子を伝える史料としては、ポルトガルの宣教師・ルイス＝フロイスの『日本史』がある。これによると、城は高い山の上にあり、遠くまで眺望でき、城内には、高山友照の妻子をはじめ、家臣たちが住んだという。右近のキリシタン大名としての原点は、ここ澤城にある。

【芳野城跡^{ほうのじょうあと}】

芳野城は、菟田野東郷・下芳野・宇賀志に所在する芳野氏の本城として築かれた中世山城である。城跡は、中央部の堀切で城域を東西に二分する。



芳野城跡遠景

西城域は、長さ105mに達する主郭部とその北西に堀切を挟んで4段の小郭が連なる。東城域は長さ約90mの規模を有する。郭の南東端は大堀切で城の東端を画している。

芳野氏の居館は、東方約650mの山裾にあり、小字名は「下ノ城」、地元では「オヤシキ」と呼ばれている。

（５）特産品、工芸品、菓子・料理等特産品

【吉野本葛^{よしのほんくず}】

吉野地方の山野に自生する葛の根を掘り上げて細かく砕き、厳冬のさなかに清らかな水で何度も精製して取り出し、2～3か月かけて乾燥させた澱粉で、葛

根 100%のものを吉野本葛と呼ぶ。芋類、とうもろこしの澱粉に比べて粒子が細かいため、水によく溶け、熱すれば透明度が高くよく粘り、口当たりや喉越しがよいことから、和菓子や日本料理に使われる。



吉野本葛で作った葛菓子

【^{もう ひ かく}毛皮革産業】

毛皮革産業は、毛皮、鹿皮、^{はくせい}剥製、筆毛の4業種に分類され、宇陀市では鹿皮の出荷高が全国シェアの95%以上、毛皮は45%のシェアを誇る。原皮の輸入から^{なめ}鞣し加工、縫製、販売まで一貫したシステムを持っている。



鹿皮の天日干し風景

【^{みが まる た めいぼく}磨き丸太・銘木】

山に囲まれた宇陀市では、古くから林業が営まれてきた。床柱などに使う磨き丸太や、銘木（形・木目・材質に趣のある木材）の生産が現在も続けられており、冬場には皮むきや天日干しの風景等があちこちで見られる。



磨き丸太皮むき

【ダリア球根】

奈良県は、ダリアの球根生産量日本一を誇る。ダリアは冷涼な気候を好むため宇陀市は栽培に適しており、榛原地域を中心に切り花と球根の生産が盛んである。ダリアには約300種類の品種があるが、当市では60品種ほどを生産している。



ダリアの球根

【大和茶】

昼夜の寒暖の差が激しく、霧の発生しやすい気候を生かし、おもに宇陀市北東部を中心に大和茶は栽培されている。もとは薬として日本にもたらされたものであるが、現在は嗜好品として飲まれている。



大和茶

【金ごぼう】

明治初期から「大和」または「宇陀」ごぼうとして京阪神市場に知られていた。肉質が柔らかくごぼう特有の芳香が高い。雲母を多く含んだ土で栽培されるため付着した雲母が光ることから「金ごぼう」と呼ばれるようになった。お正月の縁起物に重宝される。



金ごぼう

【黒大豆】

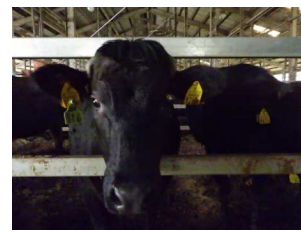
お正月の御節料理に欠かせない黒豆（黒大豆）は、大粒で甘みがあり、人気の高い食品である。宇陀では江戸時代から栽培された記録があり、各家庭の畑などで育てられてきた。



黒大豆

【肉用牛】

宇陀は県下きっての肉牛の産地で、肥育用の和牛、交雑種、子牛の生産量が奈良県の生産量の約8割を占めている。



肥育中の肉牛

工芸品

【印伝いんでん】

鞣なめして染色した鹿皮に漆で模様をつけたもので、かつては甲冑や武具に使われていた。現在では、財布や名刺入れ、手提げ鞆などの小物に使われている。



印伝の名刺入れ

【毛皮革製品せいじゅう】

毛皮製鞣せいじゅうは農家の副業のひとつとして家内仕事に始まり、近代以降は工場制手工業と生産形態を変えて、現在も続いている。兎や狐の皮を用いて、マフラーやコートなどの服飾に利用される。また、毛皮製鞣の技術を活かして生産される「セーム革」は、武具や貴金属や精密機械などを磨く布として利用され、全国で95%以上のシェアを占めている。



セーム革

菓子

【きみごろも】

泡立てた卵白を立方体に固め、卵黄をつけて焼いた菓子。おもに宇陀松山の和菓子屋で作られているが、萩原周辺の町場でも見られる。店により泡立て方にこだわりがあり、きめ細かく泡を立ててずっしり重みのある食感の店と、ふんわり軽い食感の店がある。お茶菓子として手土産に人気の品だが、参会などの伝統行事の寄合で出されることも多い。



きみごろも

料理等

【薬草料理】

薬草料理は、薬効のある食べられる野草を用いた料理で、宇陀では現在でもいくつかの店舗で提供されている。葛刺しやごま豆腐、天婦羅のほか、香草焼き、白和え、酢の物など調理法も多様である。

料理旅館を営んでいた南頭三郎氏（明治 37 年（1904）生～平成 12 年（2000）没）の薬草の研究を基に作った健康食を起源として地域に広がったとの説がある。一般家庭においても、初夏にヨモギ餅を作ったり、ドクダミを薬草茶にする習慣などが残っている。



薬草料理（薬草松花堂弁当）

【きなこ雑煮】

正月 3 日間の朝に家族揃って食べる。大根、小芋、人参、焼き豆腐、昆布などを入れ、味噌仕立てで頂く。

焼いた丸餅を汁椀に入れて出汁に浸し、小皿にとって青豆きな粉にまぶして食べる。この雑煮は大和盆地から大和高原、宇陀、吉野のあたりで食べられるもので、平成 17 年（2005）に文化庁お雑煮 100 選に選ばれ、審査員特別賞を受賞した。



きなこ雑煮（小関吉浩氏提供）

【フキダワラ】

宇陀市北部を含む大和高原から伊賀地方にかけてみられる料理で、煎り大豆を入れて炊いた御飯をおにぎりにして蕎麦の葉で包む。植え初めの際、一升枡に入れ



フキダワラ

た切子と一緒に田の神に供えられたあと、お下がりで頂く。田植えを手伝いに来た人に振舞う。

【^い亥の^こ子餅（芋餅）】

亥の子¹³の時期に作る餅。もち米1、うるち米3の割合で、小芋と一緒に炊いたあと、米と小芋をすりこ木で搗いて丸め、あんこをまぶして食べる。



亥の子餅（小関吉浩氏提供）

【とろろ汁・芋汁】

とろろ芋をすりおろし、味噌で仕立てただし汁に入れネギを入れて頂く。冬場の寒い時期に、体を温める効果があるため、しばしば食卓に上がる。



とろろ汁

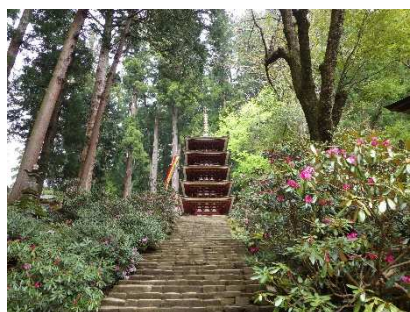
¹³ 亥の子は、旧暦10月最初の亥の日に行われる収穫祭のこと。現在の暦では11月中旬ごろになる。

(6) 日本遺産の認定

高野山は、近代まで「^{にょにんけっかい}女人結界」が定められ、境内での女性たちの参拝は叶わなかった。そんな時代にあっても、空海と縁を結び、祈りを届けたいという女性たちの願いを受け止める「女人高野」と呼ばれる4つの寺院があった。和歌山県高野町の高野山女人堂、和歌山県九度山町の慈尊院、大阪府河内長野市の金剛寺、奈良県宇陀市の室生寺である。

優美な曲線を描くお堂の屋根、静かに願いを聴いている柔和な表情の仏像、四季の移ろいを映す周囲の木々、これらが調和した空間を『^{めいしょずえ}名所図会』は見事に表現した。そこに描かれた「女人高野」は時を超え、女性とともに今に息づき、訪れる女性たちを癒し続けている。

こうした物語と歴史文化が織りなす景観が、令和2年(2020)6月19日に「日本遺産」『女性とともに今に息づく女人高野～時を超え、時にあわせて見守り続ける癒しの聖地～』に認定された。河内長野市、高野町、九度山町、宇陀市での連名による認定で、これらの自治体が連携しながら、地域活性化事業に取り組む。宇陀市にある構成要素は、室生寺境内、室生寺の建造物群、室生寺の彫刻群、大野寺、佛隆寺、安産寺である。



室生寺境内



室生寺の建造物群



大野寺磨崖仏



佛隆寺参道



宇陀市にある構成要素の分布